
東方平凡録

有夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方平凡録

【Zマーク】

Z0578T

【作者名】

有夢

【あらすじ】

朝起きたら知らない所で寝ていてたのでとりあえずどうにかして帰ろうとしたけど色々問題が出てきた為に帰れないのにここでのんびりと生きていこうと思います……あれ、作文？

♪ルルルーベ（前書き）

黙文ですが、暇つぶしなればことと思こます

ふるわーぐ

目が覚めたら知らない天井だったなんてことは普通ないはずだ。自宅の天井ではないし、家はどちらかといえば洋風の天井であった。だが、今見ている天井は洋風ではなく和風の木で出来た天井であった。

見たところ手入れがされてるついでに建てられてから結構たつているように見える。

周りを見ると和風の部屋で正面には障子、残りの三方向は襖と言つ昔の日本家屋のようだつた。

しかし、祖父母の家としては少しばかり違つよつに感じる。

色々と思つことはあるのだが、とりあえず一度整理してから行動に移ろうと考え、まず昨日のことを振り返つてみた。

朝、目覚しが鳴り響くと同時に止め、一度寝をしたりしてから起き、歯を磨き、朝食を食べ、長い道程を耐えながら学校に行き文句を思いつつ勉強し、弁当を食べ勉強し部活をしたりして、また同じ道程を引き帰しつつ寄り道なんかをしてから帰宅し、夕飯を食べ、勉強し、風呂に入り、ゲームや本を読んだりしてから寝る。

大体の学生は多分こんな生活であろう……家で勉強するかどうかだが。

まあ、俺も大体こんな生活をしていたし昨日もこんな感じだつたが、朝起きたらここで寝ていた。

自室で寝て、知らない所で目が覚めるといつのは普通なくね。どこの転生や憑依小説でもない限りないと思つ……なつてチートになりてーと何回か思つたりした事もあるが、それは昔のことであり、

俺の黒歴史の一つである。

とりあえず、ここはどこなのかを知っていたほうがいいと考えをまとめてから、俺が今までいた布団をたたみ、正面の障子に手をかけてその戸を開けた。

ふるわーぐ（後書き）

この物語を読んでいただきありがとうございました
アドバイス、感想などがありましたらお願いします

1話 わたしあつむのせ (前書き)

特になし、やれど默文

1話 セレニティアの話

戸を開けたら庭が広がっていました。

「まあ、一家にも少しばかり庭はあると思つたけど…広すぎじゃないかと思うような庭だつた。

それと、兎を庭に放しているのだが良いのであるうか。かなりの数がいるのだが大体見えてるだけで三・四十羽近くいるのだが餌や掃除は大丈夫なのかどうでもよさそうな事を考えながら庭に近づいていくと、眼にありそうな紐に引っかかり何が起きるか警戒していたら、上からタライが落ちてきたのでそれに気づき前転でぎりぎり避けて着地した場所に落とし穴があり落ちた、普通に落ちたむしろベタだと叫びながらきれいに落ちた。

用意万端過ぎじゃないかと思う3m位の落とし穴の底から上を見ながら眩いでいると人影と兎が近づいてこちらを見下ろしつつ、

「仕掛けたこっちがあきれる位にきれいに落ちたねえ」

と、兎耳を付けている(?)少女が人が気にしていることを書つて来たのでとりあえず言いたいことを言つてみた。

「えつと、なにその耳なんかのコスプレか？まずお前は誰だ。そしてここは何処だ」

と聞きたいことを聞いたら面倒くわかつて答えた。

「やつにえは、お兄さんほんとに間抜けな顔で氣絶しながら運ばれてきていたなあ」

と人をバカにしたような顔でこちらを見ながら言葉を続けた。

「私は因幡てゐ。幸せを運ぶ因幡鬼つて所かな。そして此処は迷いの竹林の中にある永遠亭だね」

と答えた。それを聞いた俺は一つの事を思い出した。自他共に認めるオタクに近い悪友がやつていたゲームの一つであった場所だつたと思う。確かそのゲームの名前は「東方Project」だつたはずだ。そいつが何回も勧めてくるからやらされたゲームだつたはずだ。なぜ、そのゲームの世界の中にいるのかと考えを深めながらいふと、てゐ(?)が話しかけてきた。

「私の名前を言つたんだから、お兄さんの名前を教えてよ

と言われても俺はなぜこの世界にいるのかこれからどうするかを考えることに集中していたので全く聞いていなかつたことに気付いたてゐは先ほど避けておちていたタライを持つて俺の頭に落とした。俺はその急激な痛みで集中が途切れ、痛みに苦しんみながらてゐを泣き目に近い目で睨みながら、

「こきなり何しやがるー。」

と叫ぶと向ひつけ

「いやちの話を聞かない罰つてー」と。頭が冷えてきたところでお兄さんの名前教えてよ

と悪氣も謝る氣もなく言つてきたので、俺はそれにイヤツをながらもひつ言つた。

「俺の名前は、月白光つきしらみつだ。」

今俺が分かっていることは此處では常識は通じないという事だけだ。

1話 そこにあったのは（後書き）

キャラの話しが分からぬ

2話 今分かつてこの江と（前編）

今までのあいさじ

落とした六から皿口縞介

2話 今分かつてこのひと

自己紹介をした後、てゐに妨害されながらも十数分かけてようやく落とし穴から出られた。

妨害の内容といつても登りきりそなとじるで押すといつやられるとかなり辛い妨害で、最後のほうは押す…じゃなくて突き落とすことによきて来たといふで登りされた。…今更だが落とし穴を作ったときの土は何処にやつたのだろう?

「それで?何で罠を仕掛けたんだ?」

と、状況が分かつてきたといふで罠について聞いてみた。

「別に、意味はないね。なんとなく面白そうだったし」

せりつと、答えが言われた。そのうえで理由も曖昧だった。酷くね、行動してる時になんとなくだけで嫌がらせするとか。そういうば、てるがさつき言っていた事が頭に残っていたので聞いてみた。

「俺は何時から此處で寝ていたんだ」

と訊ねてみると意外な答えが返ってきた。

「今日の明朝に鈴仙が竹林の落とし穴で見つけてから運んできっこで寝ていたんだけど、全く覚えていないの?」

俺は全くと答えるが、なぜ羽毛布団の中から落とし穴の中にいた事について考えていた。一つ、何処かの小説のよつて召喚に近い近いことがおきて一度下が落とし穴で落ちて気絶した。一つ、「ハ

雲紫「（そんな名前だつたはずだ）という東方キャラによつて連れ
てこられた。三つ、これらに関係なく神隠しに遭つた。

可能性としては、一つ目はないな。勇者とかじゃないから俺は
どちらかといふと後方支援をするような人間だからな。二つ目は、
ありえそうだな。会つたことも見たこともないけど、一次作品でよ
く幻想入りする時にいるけど俺の場合いたかどうか知らないけど。
三つ目、これは二つ目よりは可能性は低いと思うがりえない話で
はないはずだ。此処に来たことは済んでいるからいとして次の問
題はどうやって帰るかということだ。ここまで俺が考えをまとめて
いると離れたところから声が聞こえてきた。

「ちょっと、何でまた落とし穴があるので、てゐー！」

また兎耳少女が来た。兎との遭遇率高すぎじゃないかこという
事を思いながら周りを見渡すとさつきまで居たはずのウサギ達がい
なくなつていて、一瞬でどこに行つたんだ。

「これで遊ぶ為に」

と、俺を指差しながらそう言つた。待て、最初から俺を落とすつ
もりだつたのかこいつ。

俺の心情とは裏腹に一人の会話は続いていたので、一応止めようと
する為に一人の会話に介入する為にとあるキャラの一言を言つてみ
た。

「俺が、ガンダムだ！－！」

…その一言を言つた後は無言だつた。ツツコミもなくただ無言だつ
た。

ブレザーを着ている鬼耳少女がその状況を破壊してくれた。

「…それで、もう起きていっても大丈夫なの」

この空氣を破壊した上で俺のことも聞いてくれた。この子いい子だよ、てふと比べたら月とスッポンくらいに性格の差があるよ。

「俺は、大丈夫だ。俺の名前は月白光だがお前の名前は？」

俺は答えてから名前を聞いてみた。

「私は、鈴仙・優曇華院・因幡です」

そう言つてそこでは会話は終了した。

そこで俺は幻想郷のことを聞いて、外に出る方法を鈴仙に教えてもらつた。てふだと違つことを教えられそうな気がする。

教えてもらつたことは、ここには妖怪などがいて危険であり、外から来る人間もたまにいるということと、外に帰る方法は二つあるらしく、一つは博麗神社から外に出る方法。一つ目は妖怪賢者によつて外に出る方法である。一つ目は、此処からだと少し遠いが基本的に外に出られるらしいが行くまでが危険である。二つ目は、確實に出られると思うが何時出れるか分からぬらしい。

外に帰るのは無理じゃないか、いくらが武術などが使えようとダメージがなければ意味はなさそうだし…俺は全く使えないが。なので、作戦は出会つたら即座に逃げるという事にしておこう。そんなこと考えていたら目の前で爆発が起きた。…なんでこの二人は驚いていないのであろうか聞いてみた抜けつこうよくある事だそうだ。

俺がその事にあきれつゝ見ていると、流れ弾が俺に当たり俺が思つたことは周りを巻きこむなよということだった。

2話 今分かっている」と(後書き)

流れ弾はあの一人です。

出来れば後2・3話永遠亭で頑張りたいです。

感想、アドバイスなどがありましたらよろしくお願いします。

3話 明かされた真実（前書き）

だんだんしゃべり方が変わってきた

今までのあらすじ

弾幕の流れ弾に当たりました

3話 明かされた眞実

目が覚めたら何も見えず黒しかなかつた。

小説でよくある転生テンプレかと何かかと思ったが、顔に濡れタオルが掛けられただけだった。それが分かりタオルを取つて周りを見てみると、朝見た部屋であった。

何でまた此処で寝ていたのだろうかと記憶を掘り起こしていくと、流れ弾に当たつて氣絶したということを思い出した。

それと、薄れていく意識の中で最後に見たのは周りにいた二人でも、撃つてきた二人でもなく庭の端っこにいた兎達だつたような気がする。どこに行つたのか気になつてはいたけど屋敷の方の端にいたのだと分かつたが、塊魂のようになつていたがおもくないのだろうか。などと思つていると、

「あら、起きたの。思つてたより早く起きたわね」

その声を聞いて声のした方向を見てみると正面にある障子を開けながら何かを載せたお盆を持つている鈴仙と赤と青の変わつた服を着ている女性がいた。

「鈴仙と隣の人は……えつと、誰…ああ、大串さん？」

「違うわ」

一瞬された。

誰か知らないから言つたのにひどくないか。

「で、誰なんだあんた」

「私は八意永琳よ。一応医者と薬屋をしていっているのよ

そつ言につつ鈴仙の持つてきたお盆から怪しい色をした液体が入ったビンをじらじらに見せながら

「これを飲んでもうえるかしら」

それを見て俺の身が危ないと思いシツコミを入れた。

「飲めるか！そんな濃い紫色をした液体を飲める奴いないだろ！どう作つたらそんな色になるんだ」

「大丈夫よ。私が作つたのだから安心して飲めるわ。…試してないけど」ボッソ

「今、聞かなかつたほうがいい事聞こえたぞ」「聞こえるよ！」言つたのよ

それをはつきり言つ永琳に対し

「なにその嫌がらせ。俺に何か怨みでも有るのか？」

「特にないわ」

「もついいや。面倒くせえ…だからって飲ませようとするな」

俺は、薬（？）を飲ませようとする映倫に釘を打つておいた。

「意外と、シツコミに向つているのよつですね」

そう言いつつ、鈴仙はカルテかなにかに何かを書き込んでいく

「何の診断だそれは」

と、俺はさつきのやり取りに疲れて厭われるよつとして言った。

「後遺症がないかとか、調べてたんですけど、話を聞いていたらつい

「無駄話はいいからこれを見みなさい」

そつ言ひしきの薬を永琳が結局飲ませよつしているのですぐさま逃げよつとしたら後ろから誰かに押さえつけられて動けなくなつた。しかも、押さえ方が立とうとしてる所を座らせるのではなく、上から押さえつけるように押さえているから完全に動けない。

「誰なんだ。俺は今すぐ逃げたいんだが

俺は焦らずにこいつ見つと

「まあまあ、そつ言わざにああ

その声を聞いて俺は誰が押せているのか分かった。
てふだ。あのイタズラ兎がまた仕掛けてきた。

「何でお前は俺を押せているんだーー！」

なんとか振り返りながら言おつとしたら永琳が薬を無理矢理口に押し込まれた為に中に入っていた薬が口の中に流れ込んできた。飲んでみた感想は、まず不味いということでそのうえ完全な液体ではな

く飲むヨーグルトみたいなイメージを持つてくれたら良い。だが、ヨーグルトのように滑らかではなく粉の溶けきっていない飲み物のようである。

飲んでからまた氣絶しそうになつた意識を何とか保ちつつ飲まれたものの正体を聞いた。

「何を飲ませた」

「なにして、薬に決まつて」「どんな効果のかを聞きたいんだが」「…」

俺が言葉をさえぎつて言ったことに対し永琳は言葉を続けられずにいてためらつた後に言い始めた。

「ならまず、あなたは人間じゃないわ」

その一言は、俺の今までの有り方を変えていく一言だった。

3話 明かされた真実（後書き）

感想、アドバイスなどがありましたらよろしくお願いします

週末前には、投稿出来ればいいなと思います

4話 ひとつあるべき特徴です（前編）

今までのありすじ

人じゃなかつたそつです

4話 とりあえず特訓です

俺はそれを聞いた瞬間考えることをやめていた。けれど、頭の中は混乱どころではなかつた。

俺は人間じやない？ だつたら俺は何なんだ？ 「こ」は全てを受け入れる幻想郷なのだというのに俺は人じやないといつの受け入れられず此処に居なかつた。

考えがまとまつて来ては疑問が生まれてからまとまつて疑問が生まれての繰り返しをしていて周りが何かを言い合つていた。俺は一度考える事をやめて答えを聞く事にした。

「なら、俺はいつたい何なんだ」

「結構動搖してると思つたけど大丈夫そうね」

「そう見えないだけでかなり動搖しているぞ」

俺はそう言いつつ永琳の方に顔を向けた。

「そう。あなたは人であつて人でないものよ。精確に言えば半人・半魔に近いものかしら。：人じやないことは分かつていてけど分かつていなかつたからこそあの薬を飲んでもらつたけど」

少し考え方永琳は言葉を発しつつ俺に飲ませた薬が入つていたビンを持ちつつ言葉をつないだ。

「まあ、あなたの場合人から変わつていつたような感じなのよ。前に、死に掛けた事とかあつたかしら？」

俺は今言われたことで昔に遭った事故のことを思い出した。

確かあれば、小二位の時に帰り道で寄った駄菓子屋から家に帰るために大通りに行かないと行けなかつたので買ったお菓子を食べながら横断歩道を歩いていると信号を無視して突っ込んできた車に引かれて三ヶ月くらいの重傷を一ヶ月以内に直つたこと。それから、回復力や運動能力が上がつたこと。

俺がそのあたりが原因なのだろうかと考えていると永琳が

「思い当たる事があるようね」

と言つてきたので俺はそれに頷いてから昔遭つた事故について話すと永琳はなぜか考え始めた。

鈴仙やてゐは話についていけない様だが俺もついていけない。

今までの情報を合わせてみると、俺は人と魔族のハーフらしくそのせいでは能力が上がつていた。その力が大きかつたので幻想入りしたのかもしけれない。

俺が軽くまとめ終わつてから永琳に治療（？）も終わったからもう行くぞと言つと

「だつたら、ここで特訓していつたらどうかしら」

永林がそう言つと周りの二人も便乗するようにそれに賛同してき成り行きでここで特訓することになつた。どのような事をするのか聞くと、まず靈力などを使えるようにしてから弾幕を張れるようにしてから実戦をするそうだ。

とりあえず、靈力を使えるようにするらしい、方法としては体の中

に流れているものを見つけるか、他の人から靈力を流して自覚するかのどちらかららしい。幻想郷にいる奴らはほとんど前者の方らしいので俺もその方法でやることになった。

「まず、血以外で体の中で流れているものを見つけてください」

鈴仙がこの特訓に付き合つことになつてそのアドバイスを聞いて適當な返事を返しながら意識を自分の内側に潜つていぐと…見つけた。俺は、靈力と思われるもの見つけて意識を浮上させ田を開き鈴仙に見つけたものを手の平に出して訊ねた。

「これが靈力か？」

「そうですけど、まだ始めてから三十分位で見つけられるものなんですか」

「俺が知るわけないだろ？」「

と、少しばかりあきれながらその問い合わせに答えてから作った靈力球の密度や大きさを変えようとしたが出来ないのでどうやられば出来るか聞いてみたら、

「撃つときに決めてるから難しいかもしない」

考えながらそう言った。なので、一度消してから密度を上げてと大きさを蹴鞠くらいのを作ろうとしたが耐え切れずに露散した。この大きさで密度をどこまで上がるか試してると十数回で露散しなくなつたのが出来たが、処理をどうしようかと考えていたが面倒になつたので天空に向かつて蹴り飛ばそうとしたけど球技の才能がなく投げる蹴るといった事が下手でまっすぐ蹴ろうとしても斜めに飛んで

いつたりする。

なので空に向かって蹴つたはずの靈力蹴鞠が違う方向である屋敷の廊下を歩いている人の頭に当たつても不思議ではなかつた。鈴仙は誰に当たつたのか分かつたらしく驚きながら言つた。

「今、当たつた人は姫様なんですよー。」

……え？姫なんて居たんだ。と思いつつ氣絶した姫（仮）を永琳の所に運んだ。

4話 といあえず特訓です（後書き）

グダグダだ、ああグダグダだ、グダグダだ。ということで駄文です。
テスト前に書いている有夢です。

作業用BGMを聞きながら書いているとかなり進みません。十時位
から書き始めたのに。

感想、アドバイスなどありましたらよろしくお願ひします

5話 蓬萊の姫（前書き）

駄文ですか… とりえずやつてみた」とがあります

今までのあらすじ

靈弾が誰かに当たった

5話 蓬萊の姫

あの後、光と鈴仙は光の蹴った流れ蹴鞠ではなく、流れ靈球に当たり気絶した姫（仮）を永琳のところに運んでいた。運ぶといつても背負つているのではなく引きずつていて、鈴仙や庭に居る兎もなにも言わない事からカリスマはないのだろう。光は姫（仮）の足を持って引きずつて移動していた。

鈴仙はどこに永琳が居るのかを能力で分かつて居る為、光の前を走っていた。光はそれに対し「聴覚が優れているからだな」と鈴仙の能力『狂気を操る程度の能力』を知らずにいる為に見当違いの答えを出していた。

そのまま、庭から真逆の方にある部屋の前で鈴仙が止まつたので光もそれにあわせて止まり、引きずつていたものを一度落としてからその部屋の戸を開けた。開け放つた戸の向こう側にいた永琳とてゐはポーカーをしていてお互いの手札を見せていながら急に開いた戸：つまり光達の方を見ていた。

光達に対しその二人は急に戸を開けたことを怒り始めたために戸惑つていた。一通りの文句を聞き流した後、特訓中に作つた靈弾に当たつて気絶した姫（仮）について話すと永琳は放置していても大丈夫だつたと言つた。光はそれを疑問と思い聞いてみると不老不死だからと言われ幻想郷はどうなつていてるのか気になつたが頭の奥にしまい込んだ。

光は、魔族（？）の特徴を知つていなか聞くとそこに居た三人は思い出しながら、頑丈、回復が早い、魔力が使える、死ににくい、といったどこぞのデビルハンターの様な特徴を言われた。

そこから、光達は姫（仮）を放置して大富豪を始め六回ほどやつていると姫（仮）が起きたので終了した。結果はビリの数だと光、鈴

仙、てゐ、永琳の順だつた。能力や経験がものを言つのだろうか。

姫（仮）はどこに居るのか周りを見渡してみて分かり、そこに靈弾をぶつけた本人が居た為に光の前まで行き当てられた文句を言い始めたが光は何食わぬ顔で考え方をしていた。どうすればあの三人に勝てるのかを考えていた為、返事を問われても適当に返していくが、それなりに相手の怒りを買わない程度の返事であつた。そのやり取りを見ていた三人は姫（輝夜）は流されてるなあと思いつついた。

そんなことを考えているとは知らずに姫（仮）の話が長いために光はうんざりした顔で話を終わらせて誰なのかを聞くと姫（仮）は蓬莱山輝夜と名乗り自分は姫だと言つていたので光は三人の方を向くと全員が頷いて肯定していたので光は姫（仮）を姫（笑）に直してから自分の名前を名乗り終えた。

が、かぐやという名前と永琳から聞いた不老不死ということから竹取物語のかぐやと同一人物であるのだろうと考え方を知つている永琳はそれより前から生きていゝ…と思つていると光を睨んでいる永琳が怖くなつた為考へないようになつた。

光は永琳に靈力を扱えるようになつたと報告をすると永琳の方は空は飛べるのかと言つて来た為、否と返すと飛べるようになると言われたので靈力で飛べるのかを兎の一人に聞くと飛べると返つてきたので飛べるのかと思いつつ来た道を戻り特訓を再開しようとすると夕食時だから今日は終了といわれた。

その後の事は、夕食の手伝いをしてからそこに居た全員で夕食を食べ、風呂に最後に入り、今朝方寝ていた部屋でまた布団を引いて今日のことを思い返しつついると睡魔がやつて來たため睡魔に身を任せ眠りについた。別の場所から誰かに見られているとはいざ知らずに。

5話 蓬萊の姫（後書き）

とこうじとで三人称でやつてみました。これであつてあるかなあ
ものすぐ不安です。

1500よりなかなか文量が増やせないのはやはり下手だからだろ
うか。

こんな駄文で感想、アドバイスなどがありましたらよろしくお願ひ
します。

6話 特訓と能力と何かと（前書き）

駄文なのです。

今までのあらすじ

飛ぶ為の特訓を始めました

6話 特訓と能力と何かと

俺は、いつも通り六時過ぎに起きたがどことなく何かがいつもと違うと感じた。何が違うように感じていたが何が違うとははっきりとは分かつていなかつたが、だんだん眠気が無くなつて行くにつれてここが何処なのかがはつきりした。

ようやく働き始めた脳を動かして、昨日から此処にいたという事を思い出しても布団をたたみ昨日借りた寝間着から私服に着替えて部屋から出た。

俺は昨日通つた道を思い出しながら居間の方へ行こうとしたが、庭が見えない内側に在るため何処がそののか分からなかつた為てゐに会つまで行けないのではないかと思つた。

「なあ、空を飛ぶ方法つてなんだ？」

「さあ、考えたこともないから知らないね」

そう言いながら俺とてゐは居間の方へ歩いて行つた。

居間に着くともう既に朝食の用意がされていた。ちなみに、永遠亭はほぼ日本食…つまり和食が主である永遠亭だけではなく幻想郷のほとんどなのだろうが。

俺は、てゐにも聞いた飛ぶ方法を聞いてみると、

「考えたことはないですね。ほとんど最初から飛べてましたし」

…飛ぶ方法つて感なのだろうか、それ以外の方法はと考えているといつの間にか食べ始めていたので俺も追いかける様に食べた。途中

でてゐに焼き魚を取られそうになつたが…

食べ終わった後皿洗いの手伝いをしてから庭に行き飛べるようになりメージしたりしたが全く出来そうにない。それを見ていた鈴仙とてゐは靈力をまとつてないと言い始めた。

：先に言えよ。それが飛ぶ方法ではないだらつかと思いつつその話を聞いていた。

三十方位の話を聞き終わり教わった方法で再びやつてみたがまったく飛べる気配がない。

そこから、話しあつていると結果的に体質の問題であるといつひとで片付いた。

ならば、他の方法でやるしかないといつひとで実験…ではなく特訓の始まりた。

特訓一 精力で障壁を作つてその上に乗る

「本当に出来るんだろ?」

光は、疑問を持ちながら発案者の鈴仙に聞いた。

「しっかり作れれば大丈夫です…たぶん」

「なんか最後言つた?」

「言つてませんよ」

光は自分の前に平行な壁を作りそれを自分の手で触れるかどうか試

すと触ることが出来たので今度は自分から垂直な壁を膝の高さへくらいに作つて飛び乗つてみたら一秒経つか経たないかのタイミングで壊れたので使えるけど時間的な余裕がないといふことでどうするか話し合つた結果、厚さを増やす、枚数を増やすなどの案が出たので試してみたがどれもあまり良い結果が出なかつた為、緊急回避ようにしておく事にした。

特訓一 道具を使って飛ぶ

「道具つてどんなのだ？」

「例えば、魔法使いの箒とかさ」

光は、よくある黒い魔法使いが箒に乗つているところをイメージしたら、魔法使いが何処かの図書館から本を強奪していくようなイメージが出来たのでスルーしてから答えた。

「確かに、そんなイメージはあるな。けど、あればどうやって飛んでいるんだ」

「知らないけど、大体似たような方法でしよう

俺は思つたことをそのまま言つた

「適当だな」

「御託はいからまあやる」

光はそれに適当に答えてから、箒が何処にあるのか鈴仙に聞くべと

「庭のどこにあると思つけど」

光はその曖昧な答えを聞いてから簫を探しに行つた。
簫を探すために庭を歩き続けると簫があつたが罫のよつたな雰囲気を
出してある所にあつた。なので大回りしてから簫を取つて靈力を簫
に纏わせてから飛ぶイメージを持つて空に駆け出そうとしたが簫が
飛ばない為にそのまま重力に従い、避けておいた罫…落とし穴に落
ちた。落ちた底からどうにか飛ぼうと何回か挑戦したが飛べなかつ
たので簫を持って落とし穴をよじ登つた。

「無理でしたか」

「無理だつたな」

光は鈴仙から聞かれたことをはつきり言つた。

「そこまではつきりと言えることですか

「はつきり言えるな」

とすぐに返した。

特訓三 能力を使って飛ぶ方法

「能力つてなんなんだ」

「能力はその人が持つている力ですね」

「なら鈴仙も持っているのか」

「はい。けど持っていない人もいます」

もし光に能力がなかつたらどうするつもりであるつか。

「はあ。……それで、能力を使うにはどうすればいいんだ

「なんかこう、パツと思い浮かぶらしいですよ」

光は、あきれつつも目を閉じて能力を思い浮かべた。……あれなくね
……いや、あつた。

目を開けてから鈴仙に対してもう一度力を言つた

「『座標を操る程度能力』だそうだ」

「それで何ができるんですか? グラフとか?」

「俺に聞くな」

その後、とりあえず何ができるかを確かめていくと、
まず、自分の位置を動かすことが出来る。物を動かすといった移動
系の能力であった。この能力を使ってなんとか飛べるようになつた
のは能力が分かつてから三日後であつた。

6話 特訓と能力と何かと（後書き）

駄文です。大事なことだから前後書きに書きました。

テスト中だけじやつてしまつた。

反省はしないけど後悔はある。

感想、アドバイスなどがありましたらよろしくお願いします

7話 弾幕11つ? (前書き)

弾幕は今回不出でません。
すみません。

今までのあらすじ

空を跳べる様になった

能力が分かつた

俺が、能力を使った飛行が出来るようになったのは、能力が分かつてから三日経った後なのがこの能力の特徴は『点』と『線』を使うことであり、数値も動かすこともある。

俺の『座標操る程度の能力』は『線』があり、そこからaという『点』からbという『点』に動かすことがこの能力の本質にあるのである。例えるのなら、とあるシリーズの空間移動と座標移動と似たことができる能力であり、四次元を使った物の出し入れが出来ることも特徴の一つだ。

先に言つたaからbに動かすことはステータスつまり出せる力を変えることが出来る。簡単に言えば、グラフで表せるものは基本的に操ることが出来る。

この本質と思うものを見つけたのは、俺がこの能力を使って飛べるようになる少し前で『点』から『点』に動く距離を短くしたり『点』を固定すれば飛べるのではないかと思つていたが、俺の場合飛びことより、跳ぶ方が俺にはあつっていた。

なぜなら前回靈力で作った足場を能力で固定して使つたほうが移動しやすいからだ。

足場は出来るけど靈力じゃなくても作れ？「今まで、考え方してゐつもりなのかなあ」…現実逃避くらいしたつていいだろつ。

飛ぶではなく、跳べるよになつた後口…つまり今日なのが今は昼過ぎなので今日の朝、朝食を食べ終わり片付けをしている時に「弾幕『いつ』をしないのか」という疑問が出てきて聞いてみたら「スペルカードを持ってないから」という答えが返ってきたことからスペルカードを作ることになつたのである。

スペルカード…簡単にまとめると必殺技のよつなものであるらしい。弾幕ごっこをするには必要なものらしいので作ることになったがなかなか上手くいかないものである。理由としては、真似しきているからだ。どのスペルもどこかで見たことがあるようなものである。なぜならスペルと聞いてほとんどない東方の知識から似せて作っていたなのだから。

そのため、永遠亭の人々が光のスペルのほとんどを改造もしくは作り方を教え込んだ。

そのため何枚かできたので、試し撃ちつまり弾幕ごっこをする」とになり何回かやっているのだが、一勝も出来ていないのだった。回想終わり。

スペルも使っているのだがやはりとくにうか作り方を教えたたりしていた為ほとんど避けられてしまつのだ。

「何で勝てないんだ?」

俺がそう呟きながら座つて空を見ていると

「相手の弾幕を見てないからじゃないかなあ」

と、後ろからわざわざまで俺の相手をしていた、てゐがそう言つた。

「見てない」とはないと思つた

俺は空を見たまま答えた。

「見てるのとは近くにある当たり前なのだけじゃないかなあ」

たしかにその通りだが、どうやって見える範囲より奥にあるのだと
う気付けといふんだ。

「それに、弾幕には必ず抜け道があるし」

「やういつものなのか?」

「じやなこと、ほとんど勝てないでしょ」

「それもやうだな」

俺はそう言いながら立ち上がりがつた後氣付いた。

「輝夜はどうに行つたんだ?」

周りを見渡してもさつきまで（弾幕『』終了時）いたんだがいなくなつてこる。

「姫様なら遊びに行つたわよ」

俺の独り言に永琳が答えた。

「あんな友達のいなわやうな奴がどこに遊びに行けるんだ?」

俺が思つたことをそのまま言つと、苦笑しながら永琳は

「もう一人の蓬萊人…不老不死のところよ」

俺はそれを聞いて幻想郷の住人は何でもありだなと思いながら弾幕

「うわー、しゃくの髪に空へ跳んだ。

7話 弾幕1JAP? (後書き)

次回は弾幕から始めます。

出来るだけ、文章を増やしたり、会話や地の文を増やした方が良いのか出来るだけ聞きたいので、感想、アドバイスなどがありましたらよろしくお願いします。

ここまでのおひがし

スペルカードづくつました

弾幕ごつこそれは幻想郷で定められているスペルカ・ドルールを使つてゐる遊びで、妖怪と人が戦う為の最大限のラインである。なぜなら、元からの力が違うというところがあるからだろう。

「やつぱ無理だろこれ」

俺はそう言いながら迫り来る弾幕を出来るだけ速く避けられる場所を見つけ出して今いる足場からそこまで跳んで移動しながら弾幕を撃つ。しかし、てゐにとつては俺の撃つ弾幕は簡単に避けられるらしくわざとらしく弾幕に対し大きく避けている。俺はそれに合せて避けた先に弾幕を放つた。

「うわっ！ちょっと危なかつたよ」

「そいつはどいつも」

軽く口を返しながらも俺は出来るだけ弾幕の数を増やしているが、てゐに弾幕を撃ち込んだがやはり経験に差があるためか簡単に避けられているが、こちらも避ける為の移動を徐々に大きく避けなくても避けられるようになってきた。

「そりそり当たりなよ」

そう言いつつスペルの用意を始めたため俺は避けられるようにな中に集中し始めたてゐはスペルを宣言した。

「『鬼符』開運大紋」

その言葉を言つうが早いかさつきより多くの色取り取りの弾幕が迫つてきた。

俺はその弾幕を避ける為に出来るだけ全弾見える上空の方に方へ跳びながらなんとかてゐが見える隙間から撃つがほとんど避けられる為に俺はスペルの時間切れを狙つた。

「時間切れを狙つてるならさせないよ

てゐは俺の狙いが分かったのかそう言いながらさつきまでと移動する場所を変えたり速度を変えたりして弾幕の流れを変えてきた。そのため、急に変わつた流れについて行けずに弾幕に当たりそうになつた俺は、スペルを使つた。

「『守符』反転返し」

スペル宣言をした後俺の周りにシールドビットのような物が十個近く浮いていて弾幕が俺に当たる前に防ぎ当たつた弾幕が撃つた本人の元に直線的に弾幕を返すスペルなのだが、防御用な為耐久時間が長く一個でもビットが残つている限り時間切れ以外でこのスペルは終了しないのが特徴になっている。

スペルカードルールには全て破られると負けになるので多くのスペルを持つている人もいるが、枚数を限定しておく事もある。

俺もてゐも事前に一枚に限定したので残り一枚しかない。

残りの一枚を使わせたうえで使い切らせれば勝ちなのだが、てゐの弾幕がさつきのよりも多くなつてるので俺は反撃できずにいた。

普段からこいつらどう避けているんだ。

俺は靈力が残りが少なくなってきたため、てゐに向かつて突つ込みながらスペルを宣言した。

「『刻限』三拍」

このスペルは相手を普段より移動速度を遅く感じさせるように『点』をずらし、暗幕の速度を遅くする事で弾幕を当てやすくすることが特徴になっているが、三拍叩いた音が無くなるまでの短い時間までといつ制限が変化するスペルでもある。

俺は、時間内にてゐに接近して弾幕を撃つたらスペルの時間切れで避けられた為に弾幕当てられて落とされた。ちくしょうめ…

8 話　彈幕11月（後書き）

感想、アドバイスなどありましたらよろしくお願いします

9話 ラジオ放送第一回（前書き）

いままでのありあじ

弾幕（ひだるま）で負けました

9話 ラジオ放送第一回

「弾幕」(じ)で何回も落とされていると氣絶から目覚める時間も早くなるのだが、俺の場合は半人半魔なので氣絶から回復しやすいのですぐに起きるのだが目が覚めたら…

ラジオの収録場のような所にいました。

「えーっと、ただ今より第一回幻想郷オールナイト全時空・ヨコ・永遠亭を放送するわ」

そう輝夜が宣言した。

「何、これ」

俺はそれしか言えなかつた。

輝夜「ああ、やつてまいりました。幻想郷オールナイト全時空・ヨコ・永遠亭」

光「このラジオもどき聞いている奴いるのか」

輝夜「この放送は、八雲家の提供でお送りしています」

光「言葉のキヤツチボールをしないのか?このラジオは」

永琳「姫様が無視するのは結構前からで、このラジオも思い付きから始まつたんだから諦めた方がいいわよ」

てゐ「このラジオは此処以外でもやるから」

光「おい、それはどういう意味だなんだ、てゐ。それとハ雲家って誰の家だ」

鈴仙「ハ雲家はハ雲紫とハ雲藍のことだと思うけど」

輝夜「まあ、別に提供がなくとも放送は出来るんだけどね。能力とか使って」

光「まつたくもつて、無駄使いだな。後、何を放送するつもりだこのラジオ」

てゐ「今回は、一応主人公もどきの光さんの自己紹介らしいよ」

永琳「予想以上に扱いが酷いわよね。主人公?なのに」

輝夜「そんな事はおいておいて、進めるわよ」

永遠亭メンバー「了解でーす」

光「俺の扱い酷くないか」

光「なんだ今の電波」

鈴仙「狂つた人はほつときながら進めましょ」

てゐ「じゃあ、とりあえず

見た目は碧〇学園生徒会議事録の副会長みたいで違ひは副会長より髪が白くなつてゐる。

能力は『座標操る程度の能力』で特徴が点から点への移動だつたけ?

以上、それ以外特になし。あと、半人半魔という種族で特徴はなんだつけ?」

永琳「特徴は、人より頑丈で回復が早いとかね」

光「補足としては魔力が使える」

輝夜「けど、全くそんな設定は使われていないのよね。作者がダメだから」

鈴仙「次は、このラジオに關してです。このラジオもどきは大体九話くらい間をおいてやります。

理由はそうしないと、文字数を増やすというのもこれの目的に入つてゐるからですね。」

光「基本的な内容はどうするんだ」

てゐ「碧陽學園のラジオみたいにするつもりだつてさ。だから基本的には喋つてるだけで、

感想とかお便りみたいなのがあればそれを使つらしい」

永琳「カンペ見ながら言わなくても良いんぢゃないかしら」

光「結局の所、多段の穴埋めみたいなのか」

輝夜「東方つて意外と進めにくいのよね。原作…つまり異変は気づかなかつたりするし」

鈴仙「今日はこれといったものもないでの終わりにします。また次回(?)」

光「これ毎回此処でやるの?」

てゐ「いろんな所でやるらしいよ、これ」

永琳「悪いけどこの機材片付けておいてね、男子」

光「俺だけで?あ…無言で立ち去るな…おいで…」

9話 ラジオ放送第一回（後書き）

…これは、9が付く話か9の倍数のどちらかでしたいです。グダグダですけどこれからもよろしくお願いします。

感想、文句、アドバイスなどありましたら文句以外は出来るだけよろしくお願いします。

10話 お片付け（前書き）

今までのありすじ

第一回ラジオ放送開始

10話 お片付け

俺は前回行われたラジオの片付けを一人で行つてゐるのだがやはりなかなか終わらない。理由は、どこにあつたのかが分からないのだ。まず此処がどこなのかを知ろうとして部屋から出て周りを見渡してみると今までいた部屋の入り口に【ラジオ放送室】と書かれていた。…別に片付けなくても良いのではないだろうかと考えつつ部屋に戻り片付けを再開した。

あのぐだぐだラジオをしていた時には気付かなかつたがこの部屋の奥は物が散乱していた。永琳はこれを片付けるという意味で言ったのだろうか。しかし、見えるだけでもラジオ放送と関係のない物まであるのだが…。何もしてないより何かした方がいいので片付け…もとい掃除を開始した。

まず、下にあるものより自分より少し高い所にあるものの方が小さかつたりするので安全に取り出せると思っていたのだが予想以上に変な物多かつた。

俺は、山に成つている物から適当に取つて能力を使って庭の方に分けておこうと思つていたが、最初に取つたものが「…ジャス○ウエイ?」いや…これあれじやん、衝撃加えたら爆発すんじゃなかつた?なので天空に向かつて出来るだけ真直ぐに投げて即座に零弾を撃ち込むと爆発した。俺は、その爆発を見届けると片付けを再開した。

次に、取つたのが「…ど…ど…さんだと」あの終盤で泣ける某良作に出てくる癒し(?)系のカタカナ言葉を話し、某乱闘ゲームにも出てくる人気(?)キャラクターだ。…作者はけつこう好きだが。とりあえずこれはこのまま放つておこう。勝手に動くし。

次に取つたのは、「日本昔話?」しかも何回も読まれた形跡がある。俺は一度作業を止めてど○いさんを抱きながらラジオをする時に座っていた椅子に座つて読んでいるとかぐや姫…つまり竹取物語の部分だけ変に線で消されていたりしていた。内容を思い出しながらいると月や求婚に関係してたりする所だった。そこから俺は、ここに住んでいる蓬莱の姫様（笑）がやつたという結論を出して本ど○いさんを机に置いてまた再開し始めたがこのペースだといつまで経つても終わらないような気がしてきた。

ただでさえ此処には多くの物が放置されている為それを確認しながらやつてるので余計に終わらない。それに、ジャス○ウエイを爆発させても誰も来ないのはよくあるからなのだろうか？早く終わらせる為に俺は、能力を使って体感時間を早めて片付けを続けた。片付けをしている間にも色々なものがあつた。例えば、バイクに乗る古代戦士のベルトとか欲望の塊のメダルとか、少しばかり所かつこう昔にあつた物が放置されていた…これががあるという事は未確認生命体や欲望の王が何処かに居そうでしそうがない。

此処の名前に基づいているのかどれも読み漁った本以外はほとんど新品の様に新しかつた。

散乱していた物の片付けがほぼ終わり…と言つても、単純に整理しただけなんだけど…

片付け…もとい整理が終わり俺は部屋から開けたままの戸を見ながら訓練でもしようかと考えながら庭に出ると上空の方から弾幕の流れ弾が降ってきた。前回…結構前にこの手の流れ弾に当たつたが今は能力を無駄に使い避けながら更に見つけたジャス○ウエイを能力で手元に持つてきて上空にいる一人の次の移動地点になる所に移動させて爆発させた。

その爆発に巻き込まれた一人は墜落せずにその場に止まりながらこちらの方…俺を邪魔な物を見るように睨みつけていた。

10話 お片付け（後書き）

感想、アドバイスなどありましたらよろしくお願いします

1-1話 蓬萊の不死鳥（前書き）

出できて少し喋つてゐるくらいです

いままであらすじ

ジャスタウニーを投げつけました

1-1話 蓬莱の不死鳥

「こちらを睨んでいた一人の内の姫（笑）ではなくもう一人の銀色…けどどちらかといえば白い色をした見た目では少女…けど幻想郷に居るといううえで普通であるわけがない。例えば、姫（笑）とやり合つてから死ににくい妖怪に近いのだろうと思う。考えていた事を頭の奥に放り込んでから流れ弾が当たりそうになつたことに文句を言う為に俺は口を開いた。

「おい…お前らの弾m「いきなり何するんだ…」俺の話を聞けよ」この場合俺にも非はあるのだろうが前回当てられて…では無く被害にあつたのでここで引かないようにしながら

「お前らが何処で弾幕ごつこをしてもいいが周くる「つるさこ」燃やすぞ」すいませんでした」

プライド？決意？何それどう使えばいいの？作者の作った曖昧すぎる設定なんて使つても灰か消し炭になつたら死ぬよ、俺。

「そういえば、どこかで見たような気がするけど、何処で見たつけ？」

「お前らの流れ弾に当たつて氣絶したんだよ俺は」

それを聞いて漫画で思い出したときによくある手を叩いてから

「ああ、思い出した、あの時爆発した奴か」

「えつ…俺、爆発したの」

そう呟いてから、輝夜の方に目を向けると視線に気付いたのか俺に対して頷いている。

ここで、俺は最近どのくらいの頻度で死に掛けているのだろうか。暇な奴が居たらぜひ数えてもらいたいね。…俺が覚えてるので六回近くだ。さつき聞いた流れ弾と弾幕ごつここの始めのほうで。終えは本来の目的である家の安全のために会話を進める。輝夜は死なないからいいだろうし。

「なあ、あんた達が何処で弾幕ごつこをやるつがいいが一つだけ承

諾してもらいたいことがある

「ん、なんだ？」

「それはだな、周りに出来るだけ被害を出さない事だな」

俺がそれを言うと一人器用に空中でこけた。

「そこは私の心配とかするんじゃないの？」

輝夜だつた。俺はその問い合わせして

「そんな事する訳無いだろう。お前の心配するくらいなら日本の少子化を心配する位だぞ。よかつたな信用されていて（笑）」

「してないわよねえ」

そんな感じで輝夜を弄つてからもう一人の方に向き直つた。

「それでどうするんだ？」

「もし、それを拒否したらどうなるんだい？」

「どうもならないぞ」

「はあ？」

俺の答えを予想して無かつたようではしづかり呆れている様な感じの声が返つてきた。

「いや。だから俺はビリしようもないって言つたんだ。なんせ、俺は弾幕ごっこが苦手だからな」

自分を嘲笑うかのように言つたことに対するさすがにそこまで自分に言える自分が少し嫌になつたけど。俺が鬱になつていると、「そういえば、あなたの名前を聞いてないけど」

そう聞かれたので俺は鬱の状態で答えた。

「一応、半人半魔の月白光だ。あんたの方も名乗つてないが」

「ああ、そうだつたね。私は健康マニアのただの焼き鳥屋だよ」

「人に名乗らせておいてそれは無いだろう。だから、しっかり言つのが礼儀じやないのか」

「そうかい。なら、私は藤原妹紅。蓬萊人だ」

此処には、チートしか居ないのであるか？

11話 蓬萊の不死鳥（後書き）

戦闘は特になしで行いつゝ思います。戦闘描写が苦手ですし、etc
etc
苦手なものが大量にある有夢です。この先、大丈夫かと言いたくな
る位です。Ort
まあ、感想などがありましたらよろしくお願いします。

12話 人里へ…されど違う場所（前書き）

今までのありすじ

焼き鳥屋と出会いました

12話 人里へ…されど違う場所

此処には長寿か不死しか居ないのだろうか。居ないからの『永遠亭』なのだろうけど…この場合此処に居る兎はどうなのだろうか。月産か地球産かそこが問題だ。もし、月と地球のハーフ兎が居たらどういう風になっているのだろう…それ以前にどう違うのだろうか知らないから見分けが付かない。俺がそんな事に悩んでいると、妹紅が「何で、あんたは此処に被害が行かないように言ったの?」

「だってさあ、お前らの弾幕の流れ弾があっちこっちに行くからそれを出来るだけ抑えて欲しいと思うわけ…けど、あれはどうなつてもいいと思う」

「ねえ、だからそれ酷くない?」

あれ扱いされた輝夜は話に割り込んできた。

「「酷くない」」

「何で二人揃つて言えるの」

そんな感じで俺と妹紅は即座に否定しておいた。

「それより、何で今まであそこ…放送室に居たの?」

「何でつて…片付けの為だろう」

「え…そうなの」

「あんまり三点リーダを使うと飽きられるぞ」

妹紅がかなりメタな所を突いてきた。

「そんなことを言われても作者が駄目だからだとしか言えないのだが

「何の話をしている訳?」

「「分からぬなら話に入つてくるな…!」」

「やつぱり、酷い!」

メタな話が分からぬ時は出来るだけ話に入つて来ない方が安全である。絶対に話が通じない時や言つてることが分からぬ事が出てきたらスルーしておいた方が懸命である。理由は無いが…

「やついえば、俺はそろそろ此処から出よつと想つのだが」「俺は思い出したかのよつにその事を縁側でのんびりしていた永遠亭のメンバーに言つた。

「とりあえず、何でそう思つたか聞いておいつかしら」

「一応、ある程度弾幕ごつこも出来るようになつたし、何時までも此処で世話になる訳にもいかないからな」

「別に此処に居ても良いと思うけど、弄……遊び相手がいててゐがさらつと本音を言つた事に気にしないで、別に許可が無くてもいいけどなと付け加えておいた。

「別にいいんじやない。あなたが決めた事だし、さつき言つたように別に許可が要るわけじゃないし」

予想以上にあつさり言つものだから俺の方が啞然とした。それ以前に輝夜が此処の主だから輝夜が決めるんじやないのか？

「変な顔をしてるわよ」

「ん……ああ」

輝夜じやなくて永琳に言わると逆に辛いと思つのは俺だけだらうか。

「それより鈴仙そろそろ喋つたらどうだ？居るのに居ないよつに扱われるぞ」

俺がそう言つと鈴仙は噴火した火山のよつに喋り始めた。

「喋る所を出せないのは作者がキャラの喋り方を理解しきれていなからであつて居るから何処かで喋つておかないと空気になつたりしてしまつ事を分かつておきながら進めていますしこつやつて私がたんたんと喋つているのも能力を使つた電力」「めん、もう……良いや……そりですね」

俺は、自分から鈴仙にメタな墓穴を掘らせてしまった事を反省はしてるが後悔はしていない。反省も余りしていないのだが。

「それで何処に行こうとしているのよ」

「とりあえず、人里に行つてみようと思つ」

さつきの事から回復した鈴仙が聞いてきたので大体決まっていた行き先の人里に行くことにした。何より安全が確保されてもいるからというのが一番の理由だ。

「それだつたら焼き鳥屋に頼るか、鈴仙と一緒に行くか、てゐの能力を使つていくか。さあ、どれ？」

「チエンジで」

輝夜が意味の分かりそうで分からぬ事を言つてきたので即座に変えてみたら、体育座りで拗ねた。

「まあ、迷いの竹林から出るんだつたら道を知つている誰かと一緒に行つたほうが良いわね」

「いや別に、方角さえ言つてくれれば能力で竹林から出られるのが…」

それを言つと、全員が俺の能力を思い出したらしい。…ひでえ。

その後、どういう訳か全員と連続で弾幕ごっこをする破目に成り四銭一勝した。勝つたのは輝夜で偶然的にスペルを落とした所に攻撃を仕掛けたのだったが。

そんなこんなで永遠亭から人里を目指していたのだが、目の前には霧で包まれた場所に今居るのだった。

どうしよう…

12話 人里へ… されど違つ場所（後書き）

お気に入りとしてこの小説が入っている事にまず驚きました。と、言つても暇つぶしに読める駄文なのですから… それは置いておいて、ありがとうございます。

感想などありましたらよろしくお願いします。

13話 脳巫k 最後だけだけど 結局、回想（前書き）

今までのあらすじ

道に迷いました

13話 脳巫k…最後だけだけど 結局、回想

人里に行こうとしたら全く別の場所に居た。まあ、とりあえず場所を確認したいのだが、霧が在るためよく見えない。俺には方向音痴では無いはずなのだが、この先に進めば人里にいけるのだろうか？いや、聞いてた限りでは霧の出る所の事は出ていなかつた。

まず、此処から見える霧の奥で見える弾幕の光を見るのを止めよう。周りに季節違ひの花が咲いているので話に聞いていた異変なのだろうかと、軽く考えながら此処に居る原因となつた事を思い返していった。

あの後、俺は永遠亭から人里までの方角を教えてもらい、能力で一気に行く必要が無いと思って、歩いていこうと思い、歩いていつた…これがまず間違えだつたと思つ。

上や周りを見ていて、振り返つてみると何処が今まで歩いていたか分からなかつた。まあ、似たような所ばかりだつたから全く分からなかつたけど：

適当に歩けばその内竹林から出られるだらうと思い歩いていった。結局、三、四十分歩いていてそれらしい所、つまり竹の見えないところが全く見つけられなかつた。

永遠亭を出てからゆっくり歩いて大体一時間くらいで人里に着くらしいが、俺は永遠亭を出てから一時間半は経つていそうな気がするが全く着きそうにないし出れそうにも無い。

それから俺はなぜかあつた小さな広場で休憩していた。

「どうしよう」 そう呟いたのも仕方が無いような気がしたので言ってみたがやはり何も変わらない。

その事に溜息をついてから何かが近づいて来る音がしたので音のした前方を見ると少し大きい妖怪が居た。大体三、四メートルくら

いの大きさだ。種類？そんな事分かるわけないだろう？それでも分かることはこいつは俺を食うつもりなのだろうと言つ事だ。

俺はそのままその妖怪を見据えたまま俺の持つ靈力を放出してそいつに向かつて突つ込んだ。

が、俺は妖怪の隣をそのまま通り過ぎた。戦い？勝てるわけ無いだろうほほ純粹な日本人をなめるなよ！スペルカードルールが通じない相手に対してどう戦えばいいのか誰か簡潔にまとめて教えてくれ。妖怪が俺の行動を少し時間をかけて理解したらしく十メートルくらい間がある状態で走つている。

やはり、人と妖怪では大きさや体力が違いすぎると思つていて、後に後ろから追つてくる気配が無くなつた。何故だらうと思つて立ち止まつて後ろを見てみると、息切れしていた。妖怪でも体力に限界があるのか。というよりも「諦めんなよ。諦めたらそこで終わりだぞ！！」なんて言つていると復活したらしくまた即行で逃げた。逃げていると、何時の間にか妖怪の数が増えていた。虫っぽいのか牛っぽいのかも増えて追つてくる。

つまり、見ていてなんとなく気持ち悪いのだ。客観的に見ていれば四、五体の妖怪と一人が同じ様な速度で一方に向かつて走つている図なんて嫌だろう。十分近く走り続けて完全に振り切る為に俺は走るのを止めた。それにつられるように妖怪らも止まりだんだんと近寄ってきた所で能力で一気に後ろに周つてから更に能力を使って直線で跳んで逃げた。これは戦略的撤退ではない逃亡だ！

そんな感じでここまで来たんだつけ。竹林から出てすぐ森で其処も越えてきたらここだつたな。

そんな感じで回想を終わらせていたら

「あんた誰よ？」

脇の部分の無い巫女と会いました。それも、敵意を向けられながら

⋮

13話 脳巫k 最後だけだけど 結局、回想（後書き）

文才が欲しい。無いものはないので頑張って行きたいですね。
感想などがありましたらよろしくお願いします

14話 紅白と白黒と（漫畫セ）

今までのありすじ

道に迷いました

14話 紅白と白黒と

「それであんたは何でこんな所に居るの？」

先ほど会つた巫女から此処…霧の湖、何処のかさつき聞いておいた…に異変が起きているのに普通の人はこんな所に普段から来ないし今は余計に来ないので居るのか。

「いや、だから単純に道に迷つただけなんだよ俺は。だから、人里への行き方を教えてくれ」

「あんた、人里から来てるんだから大体の道筋くらい覚えてるんじゃないの？」

「いや、俺は此処で言う外来人であつてこれから人里に行こうとしてた所なんだよ」

「えっ、そうなの？」

どうやら俺を人里から来て道に迷つていたと思つていたらしい。服装で分からなかつたのだろうか。俺はため息をついていると

「ため息をついていると幸運が逃げるわよ」

別にいいさ。今更幸運が逃げても変わりはしないだろうしな。

「結局のところ、人里にはどっちに行けばいいんだ？人里に向かつていたら厄介事に巻き込まれて此処に着たんだが…」

「そうねえ、あっち方向だつたはずよ」

予想以上に適当な教え方なのだがそれで合つてているのだろうか。

「大丈夫よ。博麗の感は結構当たるから」

「何故に感？どの位の割合で当たるんだよ」

「ほぼ100%くらいね」

それは感ではなくて、もはや予知とかの物ではないのだろうか。

どうでもいいがFATEの直感と予知とはどう違うのだろう、どうでもいい謎だ。

本人が感と言つてるので感ということにしておいた方が楽であると言つた安全である。下手に地雷を踏まずに済ませたいが此処に来

た時点でもう駄目な気がするが。

「まあ、霧が晴れている内に行つたほうがいいわよ」

「嘘を言つた。霧が晴れているんじゃなくて吹き飛ばしたの間違いだろつて…あれ」

さつきまで霧がたち籠もつていて向い側だけではなく少し先もしつかり見えないくらいだった筈だったのに今じゃそれがなかつた位よく見える。それから簾に跨つてこっちに向つて来る黒い何かもよく見える。

「なあ、アンタ湖の方からこっちに向つて来るの見えるか？」

「何言つてるのよ。そんなの居ないでしょ…いるわね」

その黒いのは普通にこっちまで一直線に来た途中で飛び出してきた水色の人（？）を撥ねていたけど気にしてはいけない。気にしたらここで生きて生けてけそうな気がしないからな。これは永遠亭に居たときの経験からだ。

「よう。靈夢こんな所で何してるんだ」

「魔理沙こそこんな所にいるのよ」

会話を聞いていると知り合いらしい。しかし、白黒と紅白だと白しか俺には共通点が見つけられないな。

話をしているが異変が起きているのでさつきと人里に行つた方が良さそうなのでさつき言われた方向に進もうとしてそんなに進んでいない所でさつき別れたはずの妖怪達と際会した。
俺は引き攣つた笑顔をしながら

「あははは、こ、こんにちは」

言つた直後飛び掛つてきたので避けてさつき来た方向に逆走した。さつきの一人は異変の時普通に暴れていそう。白黒は普通に水色を撥ねていたことに気にしていなかつたので後ろの奴らを瞬殺出来るのではないかと思う。

居た！というかまだ喋つていた。女性といつのは長話が好きなのか？知つてゐる奴がいたら出来れば教えてくれ。

「悪いけど、後ろにいる奴ら倒してくれー！」

叫びながら走るところのは結構やり難い普段からやらないからなのだろうが。

「だったら伏せろー」

そう言つてから白黒はこいつに向ひて手を突き出して

「マスター スパーク！！」

砲撃を撃つてきたが避けられそつなのは伏せるか上くらい横？範囲がでかいから無理、なので能力で上に逃げる。あんなのに当たつたらくたばりそうだ。妖怪？普通に当たつてたけど別に大丈夫だろう。座標を固定してないので重力に遵つて落ちるが、弾幕ごつこでほぼ落ちていたので着地はしつかり出来る様にしていたのだ。…誰に言つてるんだろう？

助けてもらつたので一応礼を言つ。が、伏せろ言つてから撃つまでに余が無かつたのはどう言つ事だらう。

「えつと、ありがとう？」

「何で疑問系なんだ。そこはしつかり言つといふだらう。」

「巻き込まれそうになつていてにしつかり言えるか？」

「弾幕はパワーだぜ！」

「誰も聞いてねえよそんな事」

妖怪達とまた出会つた事のほうが知りたいね。

「そういえば、あなたの名前を聞いてなかつたけどなんて名前よ？」

前にも似たような事があつたのでさつこと答える事にした。

「月白光だ。あんた達は？」

「私は博麗靈夢でこつちは「霧雨魔理沙だぜ」まあ、そういう事だから

どつこいつとのか分からなかつたが気にしないでおいで。

14話 紅白と白黒と（後書き）

ヒロインを全く決めてません。誰が良いか決めて貰いたいです。
感想などありましたらよろしくお願いします。

15話 当方花映塚開始（前書き）

今までのあらすじ

巫女と魔法使いに会いました

妖怪に今まで追いかけられていたが白黒つまり魔理沙の砲撃に助けられたのだが、もう少し安全な方法は無かつたのか聞いてみたいが、多分ないと返してきそうなので聞かない。

いま俺が考えないといけない事はどう安全に入里まで行くかだが、一つ目は、能力を使いながら行く。これはある程度安全ではあるがまた道に迷つたりするとかなりの時間がかかるし、疲れる。二つ目は、この一人に付いて行き異変が解決した後で入里に行く。これは時間はある程度かかるがしつかり人里に行ける。そのうえ、幻想郷の事を知れる機会でもあると思う。二つ目の弱点は、この一人にそれを言って、一人の内どちらかが許可しないといけなったりするうえで、それに付いて行かないといけないので、移動が大変であるが、練習だと思っておけばいいと思う。そう考えると一つ目の方がいいと思う。

俺がこれから的事を考えが大体まとまったので目の前で話していた少女一人に話かけようとした時、「それじゃ、そろそろ行くか」俺の方を向いてそう言った。逆に俺は啞然とした。タイミングが良すぎないか読心術でも使えるんじゃないのかこの一人。

「行くつて、何処に？」

「それは、異変の起こっている最深部だぜ」

「謹んで、遠慮させてもらいます」

前言撤回、やつぱり無理だつてさ、弾幕がほぼ撃てない奴が行つても無駄だと思うし、今思うと弾幕ごつこが始まると動きが結構速くなつたりする弾幕の濃さで変わるが…。その状態で俺がいれば邪魔になるだろう。なので俺は、歩いて人里に行こうと思います。：結局前者の方になつたけど大丈夫だよな時間がかかる程度だろうし「俺は時間がかかると思うけど、歩いて人里行こうと思っている

ので、それじゃ

まあ、これが上手くいかないだろ？と思つてはいたので襟を引っ張られて動きを止められた。…扱けてない？そこは能力で使つてるからだそう言つ事にしておけ。その状態から頭だけ動かして見ると靈夢が俺の服の襟を掴んでいた。

「何所に行くつもりかしら？」

「人里だとさつき言つただろう？」

靈夢は呆れた様にして

「残念だけどそつちは人里へ向かう道じやないわよ」

「…お前、さつき俺の向かつた方にあると言つてなかつたか」

靈夢は田を逸らした。嘘だつたのか！

「嘘じやなくて方角で見るとその方向にあるのよ。でも道は違うのよ」

あれ？そんな話初めて聞きましたよ。…いや、そんな事よりさつき

読心術つかつてなかつたか？

「使つてないわよ。」

「いや、現に今読んでたし」

「感よ」

堂々と言い切つた。何処から湧いて来るんだその自信は？

「靈夢の感はすごいぜ。幻想郷の異変の奥地まで一直線で行けるからな」

なにそれ怖い。それは感ではなく未来予知とかの領域ではないだろうか。

「それじゃあ、そろそろ行いつぜ」

「うん。行つてらつしゃい」

そう言つて俺は靈夢がさつき言つていた道の方へ歩き出した。ただ、後ろから「お前も行くんだぜ」と聞こえて頭に棒で突いたよつな衝撃が来て俺は地を離れた。

なんで」「おーなるの？…思つてたよつうせいなこれ。

さっきの衝撃は魔理沙の箒で俺の頭に突撃して来たからだ。かなり痛かったな。俺は現在空の旅を恐怖を持ちながら続行中です。なんとかつて、箒の持ち手？の先端部分にぶら下がるではなく箒の付け根？（掃く部分の金具で止めてある所）にぶら下がっているから最初は持ち手の方だったけど一回変にブレーキをかけたために落ちかけた。それで反射的に箒の付け根？の部分にぶら下がっている。そのまま魔理沙が速度を上げてそれに並ぶように靈夢が飛んでいる。

「なあ、此処迷いの竹林だよな」

「ただけどどうかしたの？」

「…いや、なんでもないさ」

結局、戻ってきたな。永遠亭の奴らが聞いたらかなりの間それでいじりそうな気がする。

特にてると輝夜辺りが。

「この辺は何ともないのかしら」

「ない方が良いんじゃないのか？」

俺は靈夢の呟きに俺は答えた。だが、靈夢は何か不満なのか「あんたは分かつてないわね」みたいな顔をしている。

「異変が起きないと私の生活が大変なのよ！」

それを俺に言つてどうしたいのだろうそれ以前に俺は金ですら持つていないので…それこそどうしようかと悩んでいると

「あなた達何をしているのかしら」

今まで聞いたことのない声が聞こえて声のした方向を向くとメイドがいた。

「何つて異変の解決よ」

「靈夢、此処は私が行くぜ」

とんとん拍子で弾幕ごっこ開始

俺？急いで箒から手を放して着地しました。

他人の弾幕ごっこはあまり見たことがないのでしつかりと見させてもらおう。

15話 当方花映塚開始（後書き）

感想などがありましたらよろしくお願いします。

教訓パソコンが重いからと書いて無暗に弄らない。

16話 桜節ネタ？ タタ（前書き）

思いつかで行った反省としてこのナビ後悔は…少ししてこます。

16話 季節ネタ？ 七夕

幻想郷に来てからそれなりに日が経ち俺は人里で住んでいる。と言つても、大通りではなくそこから少し狭い道を通りた所にあるのだが。俺はそこで店を開いているといつても来るのはほとんど暇人の冷かしなのだが…まあ、俺はそこで万事屋をやっている。先に言つたように入り具合はほとんどないので某万事屋トリオと同じようなのが。

これはとある日にあつた話である。

「七夕しない？」

靈夢は毎過ぎに店もとい家に来てそう言つた。

なぜに七夕？宴会ではないのかと聞くと、

「宴会もあるけど、今日は七夕でしょう。」

どうやら宴会と七夕を同時進行でやるらしい、七夕といえば天の川で織姫と彦星が思いつくのだが、なんというか、こうその一人が幻想入りしていそうな気もしない訳なのだがどう言つ事だろ？

「それで？宴会または七夕はいつも道理神社でやるのか？」

「そうなるわね。里に居るんだし何かと買って行こうかしら？」

現在、靈夢は俺が受けた依頼で手伝つてもらつた時に一年くらいの余裕ができるちよくちよく買い物しに来る事があるのだが、
「買すぎるなよ」

一度、食料を一気に買つて処理しきれなくなりそうな時があつた。

まあ、俺が能力を使って腐るのを遅くしたのだけど…

「分かってるわよ。あの時は大変だったもの」

どうやらあの時の事に懲りているようだ。

靈夢はそう言いつつ玄関の方へ歩いて行き、とを開け閉めする音が

した後何も聞こえなくなった。

俺は息を深く吸つてため息をついた。

靈夢からの宴会もとい七夕の連絡は既にあつたからだ。あいつらそ
んなに俺に知り合い少ないと思つてゐるのかと聞きたい。友達はと
もかく知り合ひはこの仕事をしてゐるのでそれなりに居る。最初に
聞いたのは魔理沙からだつた。

朝起きてから、朝は冷えるなと思いつつ朝食の用意をしようとした所
に行こうとした時に来てそれだけ言って台所にある冷蔵庫もどきか
ら飲み物を持つて貰つていぐぜと言つて飛んでつた。…何しに来た
のあいつ？

靈夢からの開始予告を聞いてから三時間くらい経つた頃に何か持つ
てたうえで用意の手伝いでもに行くかなと思い家を出た。その間は
家計簿とかつけて時間をつぶしていた。

人里は平日でもにぎやかである。理由は此処と再起の道にしか店は
殆どないからだ。妖怪の出るような所で店なんて殆ど出すような奴
も居ないだろうから、此処は異変の時以外はにぎやかである。此処
で住んでるうえで一応店もやってるのでそれなりに顔は知られてい
るし飲食店の方々とは結構な付き合いをしていて。なぜかと言えば、
料理のレパートリーが少なかつたので教わりに行つたりしたからで
ある。兎に角も、持ち込みやすいお握り等は殆ど俺が持つて行く事
が多くなつた。あと、酒も持ち込んでいる。

ある程度買つたのでさつさと神社に行こうと思い荷物もとい持ち込
み物に名前を書いた紙を貼つて神社に送りつけた。送つた後俺は結
局慣れてないがそれなりに速くなつた移動で移動した。

俺が来た時にはもう夕方で既に宴会の用意と七夕に使うとされる笹
が用意されていたうえでもう宴会は始まつていた。見渡すだけで紅
魔館、白玉楼、永遠亭の他にも結構な人数がいた。

俺も宴会に混ざり夜が明けるまで宴会と七夕で短冊を書いたりして
楽しんだ。

16話 季節ネタ？ 七夕（後書き）

前書きでも書きましたが反省はしているつもりで後悔もあります。元々この小説はノリで出来ているのはどうしようもないと思いつつもっと伸ばせたのではないかと思えますがこれが、これが作者の実力です。できれば後々書き直したりしたいです。

17話 東方花映塚続き（前書き）

今までのあらすじ

前回、季節ネタを行つた。

前々回、幕に引っ掛かつて異変解決の巻き込まれた。

グダグダがあるので、読み難いと思いますが、ビツビツ

17話 東方花映塚続き

俺が着地して上空に田を向けた時にはもう弾幕ごじつこは始まっていた。

魔理沙はレーザー？的なものを撃つていたが、撃つている相手はメイドではなく妖精である…弾幕ごじつこだよなあ。なんで撃ち合つてないんだ？あんまり知らないけどさ。メイドの方はナイフを投げている…よく真っ直ぐ投げられるなそれ以前にナイフは無くならないのか？その辺の不思議は多分幻想郷だからで結構済みそうだよな、転送系の能力とかありそuddash;。

しかし、対人の弾幕ごじつこじやなくて何かを挟んで撃ち合つているような気がする。

いや、それ以前に俺から見ると

「あのメイド誰だよ？」

まったくもつてメイドの知り合いなんていないし、いやもしかすると実際のメイドとして仕事をする人が居なくなつて幻想入りしたのかもしれない多分そうなんだろう。…結局、メイド服着てるからメイドとして働いてるのか？さすがに趣味で着ている人はいないよな。

「何ブツブツ咳いでるのよ」

いつの間にか後ろに靈夢が居た。こいつが飛んでる時から弾幕ごじつこをしてなかつたか？ただ忘れられていただけなのか、巻き込まれても大丈夫という認識だつたのか。多分後者の方だろう、異変解決をしているという事はそれだけの実力持つているという事になると思う。…巫女と異変の関係つて何？

「今度は何を唸り始めるのよ」

「いや、異変と巫女の関係性について。だから、当事者として何かしらない？」

靈夢は思い出すことがあるのか、何か咳きながらいて

「知らない」

「何だつたんださつきの呴きは」

「昔教えてもらつたように気がしてただけだから」

それは教えたのだろうか、それとも忘れられたのだろうか、どうちなんだ先代巫女？

などと考えていると咲夜（さつき靈夢に教えてもらつた）の方に魔理沙が現れた…え？なにそれ、どんな原理でやれるのそれはと聞きたくなることをしていたが咲Y：メイドでいいや。メイドはそれに対して驚かずに弾幕をかわし弾幕もといナイフを刺していた。えぐいね、それでも魔理沙（偽）ナイフが刺されていても弾幕を撃ち続けている。なんらかのプロ魂でもあるのだろうか魔理沙（偽）にはそれとも魔理沙自身があんな感じなのだろうか。どちらにしても見た目が怖い白と黒のエプロンドレス？にナイフが何本も刺さっていてそこを中心に血が滲んでいるのに疲労や痛みを感じないように見えるのだから怖い。R15がタグについていないけど此処までならOKなのか？それでも、魔理沙（偽）の弾幕がメイドの体力を奪い切つた！…体力って今まで出てきてたつけ？結局見ていない俺。魔理沙がメイドに何か言つているがここでは聞き取れなかつたが「この……。こ…お茶に…お嬢さま…どうだ？」

よく分からぬが何を進めているのだろうか。服のポケットから取り出さなかつたかその草？異変中に取つてきたのか？それとも元々入れていたのだろうか。

「それじゃあ、次行くか」

そう、魔理沙は宣言し靈夢も頷いたので魔理沙は笄の先端を俺の方に向けて突っ込んで来た。

「待つ…て、自分で自分で飛ぶううう おおおお！」

走りながらそつ言つたが結局のところ湖と同じ展開になつた。… 2面クリア？

「痛たたた、ヽ(。ロヽ) ロコハドコ? (ヽロ。) ノワタシハダアレ?」

最後だけネタをやつてみた。テンプレの転生でよく有りそつなのを。「まだ、竹林よ。なんで抜けられないのかしら?」

「ついに靈夢の感でも抜けられなくなつたか」

「そんな事ないはずよ」

何分氣絶していたがわからないがまだ竹林の中らしい…知り合いにこんなこと出来るのがいるから余計にたちが悪い。どうせその内こつちに来ると思うから攻撃用意をしておく。

「ついに来たわね。」

そちらから来たのですがあえて言うのか。

「そこに引っ掛かっているの? 「先手必勝!」…え?」

鈴仙とてゐの一人だつたが弾幕ごつこの宣言をしてないが関係なくても弾幕を撃ち込む能力で速さ、数、威力をかなり上げて撃つた。あえて言うなら無理ゲーみたいなものである、進行方向に向かつてに避ける所を二人から最も遠い所において、一人しか避けられないタイミングにしたから。…弾幕ごつこは苦手なくせになぜそんなことが出来るかといえば能力の恩恵にしておけば大体大丈夫だろう。結果は一人とも避けきれずに墜落。しかし、何を言おうといったのだろう?

「ねえ、さつきのは反則じゃないの?」

「今のは、さつきいた妖精とかがまた出でくると思うと邪魔になるから一掃しておこうと思ったから撃つたのであってさつき出てきた二人が何か言おうとしていたのを邪魔…じゃなくて偶然タイミングがあつたからああなつたと思うけど」

一気に行つてみると結構疲れた。大変だね、一気読みをしている人は俺は三行読んだだけで疲れているから。

「いや、先手必勝つて言つてたよな」

「いやいや、あれはあれだよ…えつと、ああ、あれだあれ。気合を入れるためのセリフみたいなものだ。スペル宣言をするのと同じだ

…多分

「多分じゃ、駄目だろ？」

その後、俺が言い訳をしているうちに竹林を抜けていたのでそれいじゅの追及はなかった。ありがたくそのまま3・4面クリア？したのかなあんな方法だつたけど。まあ、良いか。

18話 道に迷つたり、異変解決しに行つたり（前書き）

今までのあらすじ

メイドと闘つたり（魔理沙が）鬼を倒したり（不意打ち）した。

18話 道に迷つたり、異変解決しに行つたり

前回、成り行きで倒した鬼二羽…一人?一匹?を先手必勝つまり行動的には不意打ちに近いが落としたからいいだろう。

今現在俺達三人ではなく少女一人が向かっている方向に強制的に連れて行かされている俺なのだが下を見ると木しかなかつた。

つまり、森であるが、やはり幻想郷普通である所の方が少ないらしい。

俺にはよく分からぬがこの森には瘴氣…つまり毒に近いものが立ち込めているうえで光が入らない位枝が茂つてゐる。

だから、普通此処には人は来ない。何が言いたいかというと道に迷うと大変だよ。と、言いたい訳なのだがなんでこんなことを言つかというと、また道に迷いました。

正確には森の方から飛んできた弾幕を一人（俺は第ニ引つ掛かつていた）避けた拍子に落ちた。

…能力で止まればいいのだが弾幕が撃たれてるので止まると余計に当たるので、あえて一言言つてから自由落下してきました。

怖いね、自由落下。速度がどんどん上がつて行くから速度を緩めようとしても現状維持で精一杯になつた。

枝がクツショソになつたうえで俺が半人半魔…だったような気がするが…じやなかつたら速度を落としても打撲じやすまない気がする。

それでも、幻想郷に居るのは大丈夫な奴らばかりだらう。

俺の今の目標は『森から出て、安全な道を通り人里まで行く』なのだが森が広すぎるうえに竹林ほどではないが道が…道が分かりにくいです。

どれもこれもとはいひながら大木が多いので目印にならないうえで木に擬態した妖怪もいるので余計に性質が悪い。

あと、擬態が見破れるのかといえばてゐの仕掛けた罠を見破れる

様にしたらそこだけ周りと違うという事がなんとなく分かる様になつたのだが普段から使えない能力である。

兎も角、さつさと出たい事この上ないのだが、さつきから妖怪に追われているので面倒になつていた。

過去形なのは逃げ切つたからだ。単純に靈弾の数を増やせたので、いろいろな物の数を増やせると思い、自分の数を増やして逃げ切つた。これは、身代わりになるのだがフイードバックが来るので特訓には丁度いいがしんどい事が分かり、逃げている途中で光が入つてきている場所を見つけたのでそこから上に登つた。：物語進んでねえ。

兎も角、そこからなんやかんだで靈夢達と合流して自分で移動することになつたので、正直ありがたい。

「ところで、今何処に向かっているんだ？」

ようやく台詞が出るが氣にしてはいけない。

「知らないわ」

「知らないぜ」

両者共に無計画で異変解決して来たのか？

さつきから幻想郷のあちこち探索してきたような気がするのだが解決まで行つていよいのはなぜだろう？

気にしたら負けな気がするので聞かないが。

俺達の目の前にはこれでもかと言うくらいに鈴蘭が咲き誇つている場所だ。

鈴蘭は強心配糖体のコンバラトキシン、コンバラマリン、コンバロシドなどを含む有毒植（Wikpediaから引用）なので正直に言えば危険である。能力で毒に耐性あげられるから楽である。鈴蘭の毒は摂取しなければいいのだからそこまで危険視しなくてもいいのだ。：一応、知識として覚えておいて損はないだろう。

その鈴蘭畑から少女が出て來た所から現実逃避という解説をしていた。

だつて、話聞かないし会話内容なんて、

「なんで鈴蘭烟く「あなた達スーさんを奪いに来たのね！…」…いたのかなあ」

「あなた達此処に何しに来たの」

「異変解けた「すーさんをうばいにきたのね！」すいませーん、人の話聞いてる！？」

まつたく話を聞かない。どうしたものかと思つていてると靈夢が、「此処の住人はほとんど話を聞かないからね」

「それ、お前らも入つていいよなあ！」

「いや、お前も入つてると私は思つぜ」

もう既に俺は後戻りできなくなつていたらしい。異変解決に巻き込まれたもんなあ。

遠い目をしながら空を眺めていると、びつやら靈夢と鈴蘭好き（仮）とが弾幕ごっこを開始していた。

靈夢はお札を撃つて…投げて？妖精を蹴散らしている。消費量がかなり多いんだろうな。対する、鈴蘭好き（仮）は基本的によくある靈弾を撃つている。

たまに靈夢の方に紫の霧がメティスン（今度は魔理沙から聞いた）の方に座布団？と例えるのが良い物や陽陽を表す丸いのが飛んでたりする。どっちにも沢山飛んでいるのだが両者共にそれらを避けて反撃している。どちらも多くの多くの弾幕を放つて避け切れず当たる事もあるが靈夢のほうが当たつていないが、霧はそのまま後方に来るのでスペルで応戦してその副作用のようなものでメティスンの方に向かっていき、白い妖精（リリ・ホワイト）が大量の弾幕を放ちどちらも完全に避け切れずに当たつたが靈夢の方がそれまでに当たつた数が少なかつたのでそのまま勝つた。

「毒も程々にしないと、躰に毒よ。」

ああ、あの霧は毒の霧だつたのか。しかし、中毒者に言つてもあまり意味はないと思うぞ。

そのまま俺達はそこを離れて別の場所へ向かつた。向かつた場所には一面向日葵が咲いていた。まだ、咲く時期ではないのでやはり

異変の影響を受けているだろうかと思いながら進んで行くと向日葵の中に傘を差して歩いている人が居てこちらに気付いたのかこちらを向いて一言言った。

「こんにちは。不法侵入者さんたち」

1-8話 道に迷つたり、異変解決しに行つたり（後書き）

次回、ラジオをしたいと思います。
感想、ネタなどがありましたらよろしくお願いします。

19話 ラジオと冥界訪問と虚刀流（前書き）

今までのあらすじ

ゆうかうん「ハンド」に行きました

19話 ラジオと冥界訪問と虚刀流

幽香「はい、こんにちは。本日は風見幽香で幻想郷オールナイト全時空への太陽畠でお送りします」

光「展開が急すぎるうううううーーー！」

～OPBG～（「皿田にお聞かくださー）

幽香「始まりました。第一回ラジオですけど連続出演の光さんはどう思いますか？」

光「まず、前回の不審者発言からは思えないような切り替えっぴりだなど、思います。あと、此処何処ですか？」

幽香「私の家よ。ちょっとセッティングしたくらいだけね」

靈夢「まあ、前回後書きで書いたとは言え急な展開よね」

魔理沙「それもそりゃだよなあ～」

光「だからと言つて急にラジオをやせられる俺の身にもなつてほしいな。面倒だし。あと、一人して他人の家で普通にお茶を飲んでいられるの？みんなして馬鹿なの？」

幽香「それは誰に言つてるのかしら？」

光「特に意味はないんですけど…すいません謝りますから起につた状態な上にこやかな顔をして殴るうとしないで下さー」

幽香「嫌よ」

靈夢「殴られている音バックにして会話を進めましょうか」

魔理沙「間違えたら死ぬけどな。とはいえどう進めるんだ？」

靈夢「外（感想など）からは何も来てないからこっちであったので進めるつもりよ」

幽香「なら、初めはお便りのコーナーかしら？」

魔理沙「此処にいるという事は…あいつは見るからにR指定がかりそうな状況だな。殴ったというよりも何か固いものを叩き付けた

よつな状況だな」

幽香「殴つてない所の方が少ない「えになんといつか…」「うつ、肉に抉り込む様な感じで殴つたといつのがある「えに、なかなか死なかつたし」

魔理沙「もはや殺すことを決定したうえでの暴力だぜ」

幽香「それは気にせずに「一ナーハー」

靈夢「『お便りの「一ナーハー』と言つてもお便りがないんだけじね」

魔理沙「お便りだつたらスキマから『殴くらしげ。』…『ほら、来た』

幽香「一枚目：『匿名希望者』から『今起きている異変はいつ解決されるのですか？』との事ね」

靈夢「博麗の巫女が解決します」

魔理沙「そこは即答するのかよ」

靈夢「それでもしないと忘れられそうになるのよね…」「ちの神社」

魔理沙「えつと…悪かった？」

靈夢「なんで疑問形になるのよ」

魔理沙「そこまで気にしてないのかと思つてたからだな」

靈夢「威張つて言つ事かしら」

幽香「まあ、一枚目行くわよ。これも匿名だけど送つてきた場所が紅魔館からね。内容は『泥棒対策はどうすれば良いですか』簡潔にまとめるところ書いてあるわ」

靈夢「農でもはつたらどうかしら？」

魔理沙「諦めて欲しい所だな」

靈夢「それ犯行をしている人のセリフよね」

魔理沙「褒めるなよ」

靈夢「褒めてないけどね」

幽香「それはいいけど、あそこにあるのどうしまじょつか」

魔理沙「自分で殺つておいて言つのか」

幽香「まだ殺してないけど。向日葵の肥料にしようかしら」

光「人のいな所で恐ろしい事考へないでくれる」

幽香「ツチ…生きていたのね」

光「舌打ちを聞こえるようにやつていいのか。嫌がらせだらう、もう」

幽香「そんな事ないわよ…一応」

靈夢「お便りもないしこの辺で終わりかしら」

光「どんな終わり方だよ」

魔理沙「以上！終わり」

靈夢「お疲れ様でした」

幽香「お疲れ」

光「これで良いのかよ」

えっと…月白光です

とりあえず、殴り殺された辺りから話を進めさせてもいい。

殴られている時から能力で少し自然回復力を上げていたからその内復活するだろうと思っていたが、殴るというよりも鈍器で殴られるような感じじな上で内臓に骨が刺さりかけたような気がした。この時に気付いたが俺の能力の根本は数値の変化なのだろう。

そのまま痛みで気絶して、知らない所に居ました。周りを見渡すとどこかの庭のように見えるが永遠亭では無いことだけは分かつた。そしてかなりでかい庭である。それなのに誰一人として庭に居ない異変中とは言え昼間なのに誰もいるのはおかしいだろう。その上見渡す限りで壁がないという事は、永遠亭よりも広い屋敷なのではないのかと思いながら何時まで此処にいると不法侵入者…否、侵入靈になるのだろうかこの場合だと。

そのまま適当に靈夢のようく感ではないが、なんとなく人の居なさそうな方へ歩いていくと、よく幽霊は白い肌みたいなことが考えられたりしそうな気がするがそのくらい白かつた。そして、その人…否、幽霊（？）を俺は見たことがあった。鑑家家長『鑑七実』日本最強にして最弱と言えるような人だ。弱くあるために長生きするた

めに他人の技術を見取っていた。そして、最愛の弟に殺してもらつた人物。

「あら？ あなたはどこから来たのかしら」

「何処つて……それは……」

言えない。気が付いたら此処の近くに居ましたなんて。嘘でもいいから入口から入りましたとでも言つておこう。

「……入口から入りましたが問題がありましたか？」

「嘘ですね」

瞬殺された。そんなに分かり易かつたのだろうか。さつき言葉に詰まつたのが原因だろうか。

「あなたが来た方向は門とは逆方向ですよ」

まさかの回答だつた。だが、言い逃れる方法はあるはずだ。……なんで、言い逃れようとしてたつけ？ 多分、否、本人だろうから何らかの武術できれば虚刀流を教えてもらいたい。

「そういえば、お名前聞いてませんでしたね。私は、鑑七実です。」

「月白光です。七実さんで良いですか？」

「良いでですよ。どうかしましたか？」

どうせ嘘を言つてもばれるのならば誤魔化すよりさつさと言つた方がいい。

「虚刀流を教えて下さい」

そう言いながら頭を下げた。頼むときは、礼儀をしつかりしないといけない。

「虚刀流ですか？」

俺はその質問に肯定の答えを返した。そのあと少しばかり無言の時間が続き、

「まあ、良いでしょう。ただし、しつかりと学びなさい」

それで俺は、虚刀流を教えてもらつた。時間的に足りないだろうから能力で体感時間を延ばした。感覚的には、うえきの『一秒を十秒に変える力』に近い。これを使い虚刀流の一通りの技を完了はいかず完成に近い形になつた。

七実さんの見稽古を東方風にすると『見た技術を自分の技術にする程度の能力』となるんだろうな。

稽古をやっていると俺がさつき来た方向から白い饅頭と少女がやつてきた。

「七実さん幽々子様が呼んでますよ。それとそこの方は？」

「一応、私の弟子?になるのかしら」

七実さんはそのまま俺に話を振ってきた。俺は、分かる範囲の上で答えた。

「弟子かどうか言われば教わっているから弟子なんだろうなあ。それとあんた誰だ?」

此処で一回やつて來た少女に話を返す

「わたしは白玉楼^(じゆりゆう)で庭師をやっている魂魄妖夢ですが、あなたも名乗つてないですね」

撃ち返された。それは、例えるなら野球のピッチャー返しのようにテニスのスマッシュのようにボクシングのカウンターを食らったがごとく。このまま例えていうときりが無いので終えるとして、一応自己紹介をした。

「俺は月白光、一応虚刀流を使える」

妖夢は虚刀流の部分に驚いていた。そんなに七実さんが虚刀流を教えたことに驚いているのだろうか?

七実さんと妖夢は白玉楼に行くらしいが、そろそろ戻らないと冥界で生活しないとダメになりそうだから戻ろうとするがどうすれば良いかわからずにして体感時間を延ばして考えた結果肉体と魂の距離をゼロにすればいいことに気づき戻った。肉体と魂が同化しないとダメな為少しの間動けずにいた。

それでも五感はあるので話を聞いていると本当に殺されそうになつたので無理やり起き上つて話に介入した。

「人の居ない所で恐ろしい事考えないでくれる」

俺が復活して残念がつて舌打ちをして

「ツチ…生きていたのね」

露骨に此処まで隠さないのは確實に勝てるからだらつ靈夢や魔理沙は置いといて

「舌打ちを聞こえるようになってしまったのか。嫌がらせだらへ、もつ

俺は思つたことをこいつと

「そんな事ないわよ…一応」

なんともまあ、残念がつて言づらずだらこの人。

「お便りもないしこの辺で終わりかしら」

靈夢がそう言って此処で俺はラジオをやつてたんだったなと思い返しながら、そして少しあきれながら言葉をこぼした

「どんな終わり方だよ」

俺とは対照的に元気な魔理沙たちは元気に各自で締めの一言を言って

「以上！終わり」「お疲れ様でした」「お疲れ」

それを眺めていた俺の一言で終えた

「これで良いのかよ」

これで良いんです。一応

19話 ラジオと冥界訪問と虚刀流（後書き）

□ 調あつてるんでしょうか？

感想などありましたらよろしくお願いします

20話 花映塚終了（前書き）

今までのありすじ

ラジオ放送をして、冥界に行き七実さんと会つて虚刀流を体で覚えました

前回、半分くらい死んで冥界に行き七実さんから虚刀流を教えてもらつてある程度接近戦ならそれなりに戦えるようになつた。……本当に少しだけで例えるなら一面の中ボスより少し弱い位だと思つ。最低でも三面ボス位にはなりたいなあ」と思いつつ移動中。行き先？靈夢の感で移動してるけどさつさつから西から東へ何回も移動している。

「何処に向かつているんだ？」

俺は先頭で飛んでいる靈夢に聞くと

「靈の集まつてる場所」

「冥界だな」

「さつき行つたけどそんなに居なかつたぞ」

靈夢があつさり言うのにつられて魔理沙も言うがそんなに例が居なかつた事を俺は知つていたので否定しておいた。

そもそも、冥界はこっちの方向であつているのだろうか……普通に冥界まで行けるんだろうなあ。

山の隣を通り越して彼岸花が大量に咲いている道をも通り越して彼岸花と不気味な位狂い咲きしている桜の近くで一人、こんなところにいるが人なのだろうか分からぬが誰かいた。

ゲームなんかで出てきそうな大きな鎌を持っている和服かどうかはよく分からぬが赤毛で長身の女性で、その人物はこちらに気付いたようで振り返り話しかけてきた。

「あれ？こんなところで何してんだい？」

「その台詞そのまま返しますよ」

「仕事してんのさ」

胡散臭いがこんなところに居るのだから一応仕事しているのだろう。

う。

「そう言つあんた達は何しに来たんだい？」

「異変解決に決まつてゐるじゃない」

「決まつていたのか。何處であろうとそれなのか。

「この人の名前が分からないな。赤毛で良いか。

「赤毛さん。あんた仕事していると言つたがどんな仕事だ?」

「赤毛つて…あたしには小野塚小町と言つ名前があるんだが」

「名前を知らなかつたのだから特徴で呼ぶしかないのだ。

「それで、小野塚さんは此処で何をしてるんだ」

「何つて…仕事だつて言つてるじゃないか」

「まさかのループなのか、いやこの場合は説明が足らなかつたのか?

どうでもいいが

閑話休題

「それで、小町は三途の水先案内人をしているという事で良いんだな」

「まあ、そうだね」

数分かけて小町からしつかり職業を聞きつめると、種族 死神：
それこそ職業じゃないのか?えつ…職業と種族が一体化しているの
か…それは違つていて職業はさつき言つてた三途の水先案内人?死
神も三途の案内人もあんまり変わらないと思うのだけど

「……ここでずつと話しているけど仕事はしなくていいのだろうか」

「それなら休憩中だからいいんだよ」

「いやいや、実際そう言いながら仕事をさぼつてゐる奴なんて結構い
るんだから仕事したら」

俺は、少しばかり呆れた目をしながら言つた。

「そんな真面目さんは世界中探しても務め始めてから一、二年でい
なくなるだよ。最低限の仕事さえすれば一応給料は貰えるだろうし」

「そんなことを言つて死神……この場合は水先案内人の仕事
時間つてどの位なんだろうか。それとサボると余計に仕事時間増え
るんじゃないのか。魂がどうのこうのとかで仕事の時間を増やされ

そうである……多分。

靈夢と魔理沙は閑話休題したあたりで自由に何かしている。靈夢はこの近くにいる幽靈を勝手に除霊している……そう言えば除霊した後、靈は何処に行くのだろうか？魔理沙は自分の道具を確認していた。何処にそれだけ仕込んでいたんだ。戦場ヶ原さんの文房具みたいに持ち運んでいるのか：半袖だけどしまつ場所少ないな。

「ずっと話し続けるのも何だから、動くか？」

俺は、小町にそう問い合わせて向こうがそれに肯定したので立ち上がりた。動くと言つても運動ではあるがやはり弾幕ごつこだが、接近戦込でやることにした。そうでないと俺が不利過ぎるから。

俺達はそれなりの距離大体一〇メートルを開けて立つている
小町はさつきと変わらず普通に立つている。鎌は両手で持つて：
…握つて肩にかけている。

俺は、虚刀流七の構え『杜若』でいつでも動けるようにしている。
ちなみに、審判役に靈夢が居る。

俺達は、否、俺は合図があつてから即座に小町の鎌の目測での射程範囲に入り込み逆に鎌が振れない距離を保ちながら攻撃するため
に『蒲公英』を打ち込んだが、ついさっきまでそこに居たはずの小町は急にさつきいた場所から少し下がつていて、鎌を振り下ろした。
俺は技を撃ち終わった状況から体重を前方にかけてから『薔薇』
に繋げて攻撃したが、また後ろの方へ移動していった。

瞬間移動と言うよりも地面を滑るように移動していた。

死神の鎌にしろ能力にしろ俺の現状からだと厄介だという事には
変わりはなく、相手を探るために一の構え『鈴蘭』で攻撃を待つて
いると一気に距離を縮めて来たので攻撃を受け流して反撃しようとする瞬間、小町の姿が消えて俺は反射的にしゃがんだ。

「へえ、今の避けられたんだ」

「そいつはどうも！」

しゃがんだ状態から『牡丹』を繰り出しながら立つたが、これは

後ろに跳ばれて避けつつ、弾幕を撃つて来た。弾幕込の接近戦じゃなくて接近戦込の弾幕ごっこだつたな。

それを認識し直した後、密度も威力も少ない弾幕を小町の居る方向の空いている隙間に打ち込みながら弾幕の中に自分も突っ込んだ。小町は俺の撃つた弾幕を弾きつつたまに避けながら弾幕を撃つて来た方向に多く撃つていた。

俺は、弾幕を避けながら当たりそののは靈力を纏つた腕で逸らしながら近づきながら弾幕をさつきよりも多く撃ち込んで地面に当たった弾幕で砂煙が満ちるのを待ちつつ接近していた。撃つて来た方向に弾幕が集中するので撃たれる方向、つまり小町の後ろの方から弾幕が来るよう有能力を使用しながら調整して、そちらの方に弾幕が集中したのを認識すると能力で小町の上に移動して攻撃に移つた。

「虚刀流七の奥義『落花狼藉』！」

俺は、自らの足を斧と見立てた踵落としを行つたが、直撃する一歩手前で小町が前方に移動していた。

落花狼藉は不発と終わり地面に当たつた。

「今のは危なかつたね。それにしてもどうやって移動してきたのさ」「それを教えたら負けるだろうが。それを言つならお前に攻撃が当たる直前に何回も前後に移動してるだろうが。解けその能力」

「嫌だよ。解いたら攻撃が当たるだろうし」

それもそうだが、当たらないと終わらない。それにしても、落花狼藉は避け切れなさそうな距離で言つたがどうやって移動したんだ？当たると確定していた距離で避け切られていたから移動系の能力なのだろうか。弾幕は弾いていたからよく分からないな。

「考え方をしている暇はあるのかい！」

そう言われた瞬間目の前に鎌が通り、薙ぎ払いから切り上げ振り下ろしそこから回転を加えて薙ぎ払い振り下ろし振り上げると言つた感じの連続攻撃が行われて俺は薙ぎ払いは確実に避けて切り上げと振り下ろしは出来るだけ避けつつ弾いていた。

このままでは本当に終わりそうにないので反撃に出た。

切り上げを行つた時に虚刀流三の奥義『百花繚乱』で鎌を次の攻撃に繋げ難くして能力で距離を縮めて固定し最終奥義を撃ち込んだ。

「七花八裂！」

相手に虚刀流にある七つの奥義をほぼ同時に叩き込む奥義を、小町に打ち込んだ。

「やつとて何だが、大丈夫か？」

俺は、さつきと言つても十数分前まで戦つていた小町に安否を確認した。

「その大丈夫の定理が生死だつたら大丈夫だね」

七花八裂は受けて十数分で回復が出来るものだろうか。

そう言えば靈夢と魔理沙はどうしたのであろう。戦つていた時は弾幕ごつこをしていたと思うが。

「あれ？ 終わったの？」

「何だその言い方は「まるで終わりそうに無かつたの」にみたいに聞こえるぞ」

「そうだと思つてたけどな」

靈夢と魔理沙が戻ってきた。それと、後ろに居る帽子をかぶつた緑髪は誰だ？

「あなたですか。小町と戦つていたと言つのは」

「？…ああ、俺か。まあ、そうだな」

隣で休んでいた小町と靈夢、魔理沙は耳を押さえていた。

「そう、あなたは此処にいるべきものではない。自分の居場所に戻れないでただ流されているだけ。それも、ただ流されているだけじゃなく周りも巻き込む大木のような存在。あなたの罪は自分で決定しきらないこと。あなたは今すぐ私に裁かれなさい…って逃げないでください…！」

逃げた。ただ逃げた。罪のあたりで逃げた。説教を受けるのはいいが裁かれるのは断らせて貰おう。説教と裁きから導かれる職業 + 死神の上司？＝ 閻魔？

まあ、良いや。今は逃げるのみ。

十分後、捕まつて裁かれて（弾幕を食ひつつ）冥界に半靈状態でまた行きました。

20話 花映塚終了（後書き）

感想などあつまいたらよろしくお願いします

21話 裁判の後にまた冥界（前書き）

い今までのありすじ

小町と戦つて勝つた後に閻魔様
なく裁判と言つて彈幕を食らひ
映姫様に弾幕といつ裁判では

21話 裁判の後にまた冥界

まあ、死にかけてまた冥界に行つた。

前回ついた場所とは違う所に立つていた。見渡せば、前に階段、後ろに階段、左右に桜。

冥界だと思うけど何処なんだろうね。まあ、また歩いていくんだけど。

そう思いながら、階段を上つて行つた。

……長くないかこの階段。十分以上歩いているのに頂上が見えないんだ。最初に居たところでは、地面が見えたのに…降りればよかつたのかあの場合。

今更そう考えても無駄なので上ることにしてはいるのだが、結構面倒になつてきた。異変は解決されたらしいが、此處にいる妖精達は俺を見つけるなり、向かつて来るのを撃退しなければならないし、遠くにいるのは弱くとも弾幕で一応倒せるけど、特攻を仕掛けてくるのを撃退するのが本当に面倒なのだ。

普通に殴り蹴ると言つたことをしても威力が弱いから後ろに飛んでいくだけなので殺傷性を持つ虛刀流の技を使つた方が良いのだが数が多いし、幽靈もたまに居たりするので弾幕と接近戦をうまく分けないと戦いにくいうえに幽靈に接近戦は無理だろうから弾幕で落とすしかない。

足場も不安定という事もあり立ち止まりながらじやないと撃退は出来ないという事もあるので進んで戦つてを繰り返している。

経験値はいらない。なぜならレベルを上げると、怠慢になるから。
…それでも、経験値は手に入るが、レベルは上がらない。

と言つて、レベルが上がつても呪文も特技も手に入らないんだろうな。それでも技の熟練度は上がるから例えると何だろう?

そう考えをまとめてまだ見ぬ頂上を見ながら まだ見えないが

階段を上つて行くと上方から三人飛んできた。

誰だらうか分からぬが戦闘にならないだらうと思ひそのまま進もうかと思い進んでいると、さつきの三人のうちの一人が急に降りてきて腰に差していた刀を振り下ろした。

俺は、何とか頭を一刀両断とも言ひ切られずに後ろに跳び、足場を製作しそこに一度降りてから、階段に降りた。

「貴様、何者だ！」

「その台詞、そのままバットで打ち返してやるよ」

そう言いつつ、襲つてきたやつの特徴を確認すると白髪、一本の刀、少女、半靈。つまり、魂魄妖夢であつた。

「つてなんだ、妖夢か」

襲つてきたのが一応、さつき知り合つた奴だと分かると俺は呆れた。

「なぜ私の名前を知つてゐるのですか。答えなさい！」

「答えを聞くなら切りかかろうとするか？」

そう言いつつ、俺は向かつて来る刀を何回も逸らしながら階段を上り下りをしていた。しかし、刀を振りながらここまで階段で動き回れるのだろうか。コツがあるなら後で聞こう。

技を仕掛けるとしても足場が悪いため仕掛けにくい。ならば、さつさと名乗つて終わらせる。

「俺だ。月白光だ。分かつたからもう振るな」

そう言いながら俺は、白刃取りをしていた。妖夢の方が上に居たので簡単にできた。

「そんな訳ないでしよう。彼は男です」

「お前は、俺が女に見えるのか」

地味に傷ついた。…それ以上に何故女に見えるのかが気になるがな。

「妖夢さん。彼は光ですよ」

七実さんが助け船を出してくれた。七実さんが言つたことで妖夢は刀を仕舞つた。危ない奴だな。

その後、妖夢に謝られてどうしようもなくなくなつたりした。

「しかし、何で女と間違われたんですかね？」

間違えを正してくれた七実さんに聞いてみた。

「ああ、それはね。髪がかなり長いからよ。女性に見えるかもしない位にね」

……ああ、ラジオで死にかけた時に細胞を活性化させて回復させてたので、髪とかも伸びたのだろうか。だとしたら、面倒だな。死にかけた時に回復させる方法を変えないといけないからな。

「そういえば、何処に行くつもりなんだ？」

冥界在住の人々が早々冥界をでないと思つし。

「それはねえ。神社で宴会をするからよ」

ナイトキャップに近いものをかぶりピンク色の髪で和服を着た女性が答えた。

「……誰？」

正直な感想だ。向かっている先は分かつたが、誰なんだろう。

「この方は、白玉楼の主の西行幽々子様ですよ」

妖夢がさらつと答えてくれた。あの時、幽々子様が呼んでいるとか言つてたな。

「よろしくねえ」

笑顔で言われた。俺も自己紹介した方が良いんだろうか。

「宴会があるのは異変が解決したからなのか」

「ええ、魔理沙さんがそう言つてました。幕の後ろに何か

乗つてましたね」

「多分、それ俺だと思う」

魔理沙が運んでいるのか。魔理沙はどこを通つて白玉楼についたのだろうか。途中で見かけたなら如何にかして欲しかつた。

多分、今の俺は四分の三で構成されていると思う。残りは、体の中にあるかな…あればいいな。

無かつたら靈とか入り込みそつだし例えば、銀魂のスタンドとかなんかその辺の靈とか。

まあ、そのまま神社に向かって移動することになつたけど、途中

で幽靈に会つた時に妖夢が樓觀劍と言ひ劍で幽靈をどんどん斬つていた時楽しそうにしてたのは中毒だからなのだろうか。そうでないこと切に願う。

そんな調子で進んで行くと、幻想郷 자체を見渡せそうな所まで来ていた。その近くにポンとそう言つた方が良さそうな神社があり、そんな場所にあるのになぜかそれなりに人が居た。否、人外もいた。むしろ、人の方が少ない。そんな場所だつた。俺も一概に人かどうか怪しくなつてきたが… 主に靈体化で。

まあ、俺がそんなことを考へてゐる間に妖夢たちは降りていたので、俺も降りた。

21話 裁判の後にまた冥界（後書き）

感想などがありましたらよろしくお願いします

22話 何だかんだでグダグダするのがこの小説（前書き）

酒を飲むなら飲まれるな。それが、酒を飲む人のルールです。

22話 何だかんだでグダグダするのがこの小説

俺は、宴会会場である神社に到着した。

と言つても、さつきからいたような感じだがな。

まあ、着地した後に冥界メンバーが集まっていた場所に向かつた。向かう前に、靈夢に捕まつた。

「何で、此處に居んのよ」

まさかの言葉だった。そして、俺は否定されているような感じだが。

「俺が、此處に居たらおかしいのか？」

「あそこに居るのに居るからおかしいんでしょ」

そう言いながら指を…指を指しながら言った。

指された方向を見てみると魔理沙が枝で俺の体を突いていた。

「お前は何してんだ」

俺は近づきながら言った。

魔理沙は俺の声が後ろから来ると思わなかつたようで、驚いていた。

そんなに驚くことか？

「何つて、見ればわかるだろ？棒で突つ突いていたんだ

「何の嫌がらせだ？」

氣絶もしくは品詞の人間にやる事じやないと思うんだが。ああ、半分は人間じやない俺。

「そういえば、魔理沙がここまで運んだのか？」

「ん、そうだぜ。あそこにいた中でもっとも人を楽に運べそうのが私だつたからな」

「その割には行きよりも雑だつたらしいけどな」

そう言つと魔理沙は顔は逸らしてなかつたけど、田を確實にそらしていた。

それを見て俺は、追撃を仕掛けようと思つたのでやれりつとしたら

後ろの方から

「此処に居ましたか。でしたら、あの時の続きをしましょつか」

そんな声が聞こえた。俺はその声の聞こえた方向に恐る恐る振り向くと、闇魔様がいた。

「な…な、なんでいつですか？」

「パニックになりすぎて意味が伝わらないぜ」

「……なんでいるんですか？」

「なんで居るのかと言われても…私がここに居たら問題が有るひとも言つのですか」

うん…口で元々勝てる気はしなかつたが面倒だぞ。なら、どうする。逃げる通してもどうやつて逃げる？実力差はかなり広い。氣を逸らして逃げるしかない。

「あつ…あそこに空飛ぶメイドが…！」

今だ…！

魔理沙と闇魔様が今俺から見て後ろの方に指を差し視線が向こうを向いている間に走る。

「そんなの結構目撃してるぜ…って、おい！」

魔理沙が俺が逃亡したことに気付いたらしく、説教をするためか飛んで追いかけてきた。

足止めをするためか、弾幕を撃つてくる。今は避けなくてもいい位だが、当たれば即座に追いつかれて説教と弾幕が待っているだろうから、逃げ切るしかない。…あれ？自業自得？いやいや、そんなはずは、そんなはずない訳でもない。逃げ切れるか？否、逃げ切るしかない。神社の前にある階段を一気に駆け下りながら後ろから迫りくる弾幕を避け切る…無理だつた。後ろを向かずに後ろからくる弾幕を避け切るなんてそう簡単にいかないし、上手くいっても何回も出来るのは限らない。俺は、後ろから来た弾幕の一つが背中に当たり階段を転がり落ちた。思いつき死ぬかと思つた。

幽靈だから死がないという訳あるはずない。この状態…幽靈でも五感はある。味覚は分からぬが。当然、体力…靈体だと靈力か

? もある。

まあ、間違えたら死ぬ。隙さえあれば逃げられるけどその隙がない。

「何してこるのかしら。あなた達は」「そんな声が後ろから聞こえた。俺は、後ろを見るとどこかで見たことのあるメイドが居た。うん、一人しか知らないけど。」「えっと、咲夜さんだけ」

「私の名前をあなたに言つた記憶がないんだけど」

「靈夢から聞いた」

どうやらそれで納得したらしい。

「私の話は聞かないくせに気楽でいいですね。あなたとはしつかりO H A N A S I をする必要がありますね」

「今のお話って発言方法おかしくなかつた? 気のせいじゃないよね。絶対違うよね。意思疎通じやなくて殴つたりする方だよな。閻魔様」

「ふざけているのですか…それと、私にも四季映姫・ヤマザナドウと言つ名前があります」「絶対後半は名前じやない」

さてさて、時間も稼いだので逃げますか。俺はそう思い、能力で距離をなくして肉体に入りこんだ。

その一瞬あつた浮遊感が無くなり、自分の周りに何か…感覺的には全身タイツみたいなくつ付いているような感じがあつた。二回目だけど慣れないな…慣れたら駄目なんだらうけど。

俺は即座に起き上がり、さつき走つて行つた階段とは逆の方へ走り出しました。が、それは途中で止められた。無駄に高い身体能力で一気に駆けようとしたが…したが、急にエルボーを食らつた。食らう前に技の名前みたいなのが聞こえたが今の俺には技を食らつた痛みの方が辛い。

急に攻撃してきたのは、誰なんだ。

「何処に行こうとしてるのさあ~。今日は宴会だよ~

酔つている。完全に酔つている。しかも、幼女。あと角が生えて
いる…角!? なんで角が生えているのさ。

「ほら、飲んだ。飲んだ」

絡み酒とは…面倒だ…だから誰なんだ、こいつは? よくよく見れ
ばさ知らない人ばかり。

知つていてる人だけだと、冥界組 幽々子さんが大量に食
べて妖夢が料理を持ってきて七実さんがそれを見つけてる。見ていて
平和だなあ、あそこは。

次、永遠亭は、鈴仙がてゐを追いかけている。で、二ートと妹紅
が上空で弾幕ごっこ、永琳と誰かが喋つてて。その誰かの特徴は
銀髪、青っぽい服を着ていて、あとなんかこう…羽? の付いた帽子
をかぶつていた。

他、咲夜さん所、羽の生えている水色の髪の少女の近くで待機中。
その少女がこちらを見つけてるが俺は目を合わせてはいけない。その
近くに金髪で変わった羽を持つた少女が居る。その羽で飛べるの?
その近くでチャイナ服を着て寝ててる人もいる。…人じやないんだ
ろうなあ。ここにどれだけ純粹な人間がいるのだろうか。多分二桁
ないと思う。

後は、靈夢の所に取材しててる人もいる。取材しててるけど、その
取材内容を幻想郷で伝えられるのか?

メディスンと幽香さんも何か話しぃんでる。多分、花についてだ
ろう。

隣りに居る幼女が飲めと言つてさつきから五月蠅いで盃を取つて
きたら酒を注いでくれた。

「なあ、あなたの名前は何なんだ?」

俺はそう尋ねながら、酒を口に含んだ。

「あたしの名前は伊吹萃香。地上に居る最後の鬼だよ」

鬼…鬼? 鬼つて桃太郎や金太郎などで出て来るあの鬼だろ? 鬼つ
て、こんな感じなんだな。

そう思いながら、つがれていた酒を飲みこんだ。

その後の事は特に覚えていない。萃香に、結構飲むんだねと言われたがなんだつたんだろう？
宴会の片付けならしつかりしましたよ。ほぼ一人でね…

22話 何だかんだでグダグダするのがこの小説（後書き）

感想などがありましたらよろしくお願いします

23話 後片付けと田舎地へ（前書き）

二次ファンよ……私は帰つて来……ごめんなさい。調子に乗りました
テストが数日後なのに投稿。反省はしている、後悔はしていない

今までのありすじ

宴会で酒を飲みまくつてました。

23話 後片付けと目的地へ

俺はせつせと働いていた。

理由は特にないが働いていた。と言うか、働かないと許しそうになかった。

靈夢がこちらを思いつ切り睨んでいる。

「飲み過ぎ、食べ過ぎ、ソル…」「それ以上はアウトだ…」

をしていた。

嘘くさい。記憶にないし、誰か知っている人か居たら教えてくれ。人じゃなくてもいいから。

そくさと前もつて言われていた台所に行つて食器を洗つていた。

「ハルヒンだけあるんだ。それがモードJの本にならなかつたはずだぞ。

「追加持つて来たからよろしく」

靈夢はそう言いながら多分外にあつたであれいつ食器たちを置いて

行つた。

あれ？これで増えているの？そう思ったので俺は洗うのを一回

止めて外を見に行つた。外にあつた食器はあつた様子もなくただ、参拝客の居ない閑古鳥も鳴かないであらう神社があつた。

「何か言つたかしら？」

「イイエ、ナニモイツ テマゼン」

事実、俺はないも言つてはいない。ただ単に思つただけだ。それでも奴はそれに気付くというのか。それなんてニユータイプ？

「じゃ、まだ皿洗いあるから行きますね」

そう言い残して来た方向に向かつて歩いて行つた。

長かつた…ああ、長かつた…長かつた。

どこかで見たよつた俳句だつて？俳句じゃなくて、思つたことを吐き出した結果だよ。つまり、朝からやつて昼過ぎに終わつた。皿洗いだけで。おかげで手が、しわのない所を探すのができない位になつてゐる。

「なあ、靈夢？」

「うん？何？」

「俺つてさあ？最初は人里に行こうとしてたよな。まあ、何だかんだでついて行く事になつたけど人里へ行く道を教えて貰つてないんだが…おい、顔をこっちに向ける」

「忘れていたわ」

「予想以上にあつさり言つた！！」

そんな会話をしながら、俺たちは今、まつたり休憩中なのである。まあ、靈夢は俺が休む前から休んでいたけど

「それで、どうやって行けばいいんだ？」

「そうねえ、なんか向こうの方に進んで行けば行ける筈よ

最低限その方向に対してもう一歩進んで指くらい指してもらいたい。お茶を飲みながら言わると異常にむかつくのは何故だろう？

そんなことを考えながら隣に置いてある煎餅に手を出したが、なにもなかつた。

さて？さつきまであつた筈なのに、大体八枚くらいはあつた。

「靈夢？煎餅たくさん食べた？」

靈夢は俺の方を見てこいつは何を言っているんだろうみたいな顔をしてから、煎餅があつた場所を見て無くなっていることに気がついた。

「なに食べきつてるのよ」

「俺の性にするつもりか！」

軽く恐ろしいことを言ってくれるもんだ。無くなっているから食べたかと聞いたら俺が知らないうちに食べていたという事にしてた。靈夢、怖い子。

「まあ、冗談は置いといて」

「声色が冗談に聞こえなかつたがな」

「誰にも気付かれずにせんべいを取ることが出来そつなのならいるわよ」

「なんでもありだな此処は」

空飛ぶ巫女さん、普通の魔法使い、完全で瀟洒なメイド、半人半靈の庭師、華胥の亡靈とかいるんだから、これ以上増えても何とも思わな……なくもない。個性的すぎるだらうどう考えても。

「それで犯人は誰なのでですか、靈夢さん」

「犯人の特徴は、空間を移動できて、異空間の中に住んでるのよ」

「先生、その特徴だといまいち分かり切りません。と言うかその犯人自体あつたことが無いのでわかりません」

俺は、事実を言つてゐるし空間を移動できるってなんなんだ？俺が飛ぶ時みたいに移動するのか？それとも、どこぞのまほー使いみたいに空間に穴をあけて移動するのか。…空間に穴か……頑張ればできそうな気がする。やらないけど。

「まあ、犯人はスキマ妖怪よ」

「いや、だから誰だよ。その物と物の間に居そうな妖怪は」

スキマ妖怪と言わてもどんな妖怪かわからない。スキマと言わると家具と家具の間で掃除がしにくい事が思いつく。…スキマ…

…家具の間…掃除…埃

「埃みたいな妖怪なのか」

「誰が埃のかしら」

少し怒っているような声が後ろから聞こえその直後俺の後頭部の上から棒状の何かが叩き付けられた。

叩き付けられて、俺はその叩き付かれた勢いで縁側から転がり落ちて一回転して叩き付けた人物を確認しようとする前にさつきまで持っていた湯呑からまだ残っていたお茶が俺にかかった。

「熱ッ！」

殆ど服にかかつたためそこまで被害は多くなかつたが熱いものは熱い。

軽く服を乾かすために扇ぐ……いや違うな……まあ、その服を乾かしているという事でおk?

「誰だ、あんた」

金髪、和服、ナイトキャップのような帽子をかぶり傘を持つている女性がいた。

あれが、靈夢が言っていたスキマ妖怪なのだろう。確かに空間移動が出来るようだ。じゃなければこの参拝客の居ない神社にタイミングよく居るはずがない。

「やっぱり、紫だったのね」

やはり靈夢とスキマ妖怪

紫

何処となく取りつく所がない訳ではないがどこかであつた事が有りそうな感覚がする。多分それは、何処となく胡散臭く感じるからだろう。

俺は、やはり彼女に似た人物にあつたことがあるのだろう。だが、俺はそんな気がするだけであつたこともないのかもしけない。まあ、戯言だな。

「いえ、私は食べてないわよ

まさかの発言だった。つまり彼女以外で犯人はいるという事になる。

しかも彼女と似たような能力を持っているという事になる。

「そうじゃなくって、あなた達が普通に食べていたというだけ

の話よ

つまり、彼女は煎餅がどうのこうの言つてあつ前から俺達を、もじくは靈夢か俺を見ていたという事だ。

さつき靈夢は異空間の中に居ると言つていた。それが表わすことは異空間の中から移動や空間に穴をあけてそのあけた場所からその様子を見ることが出来るという事だ。そこら辺から導き出せる彼女の能力は空間に干渉するものだろうか。しかし、少しだけ気になることがある。俺は、彼女の今持つている傘で後頭部を攻撃された。あまり関係ないかもしれないが最近…幻想郷に来てから体が頑丈になつているのにあの傘は、曲がつてもいない。不思議な傘だ。

「そこはもう少し突つ込むところじゃないかしら」

どうやら心も読めるらしい。まさか、心の隙間を覗くことが出来るからか。それならスキマ妖怪と呼ばれてもおかしくないな。

「どう考へてもおかしいでしょ」

「それで、一体何の用なの?」

スキマ妖怪が独り言のように呟いているのを見るのに飽きたのか靈夢が質問した。

その質問が来る事が分かつていたかのようすに胡散臭い笑みを浮かべながら答えた。

「それは、彼を人里に連れて行くためよ」

どうやら、俺はやつと目的地に行けるらしい。

23話 後片付けと田舎地へ（後書き）

感想などがありましたらお願いします

24話 戦闘シーンって細かく書かないと伝わりにくいが読者の想像が頑張るよ

タイトル道理に戦闘だけどヘボい。

今までのあらすじ

人里へ行けるようだす。あと、片付け

24話 戦闘シーンって細かく書かないと伝わりにくいが読者の想像が頑張るよ

今、俺は人里の近くで戦闘態勢に入っている。

理由？あのスキマ妖怪のせいだよ。人里に行けると思つたら落とされた。あれが、スキマ妖怪と言われる理由なんだろうと思ひながら落ちていく。スキマのなかで大量の目に見られながらいたけど、あれに慣れたらなんとなく馴染みになりそうだ。いろんな意味で。

そう思いながらいるとその空間にも終わりが来た。目に見られている空間からさっきまで見ていた青い空が見えた。俺はさっきまでいた空間の出口がある上空を見るとリボンに両端を縛られたいような空間がリボンをほどきながら……解かれながら閉じていくところだった。神社の方も俺が落ちた後はああやつて空間を閉じたのかどうでもいいものに感心しながら、迫りくる地面に着地する準備をし始めた。

落ちた先は軽く戦場だった。いや、敵陣の中と言つた方が良いような気がする。

目の前だけでも、人の形を取つていらないのが沢山いる。さらにその奥には、人里だと思われる場所が見える。多分だが、こいつ等は里を襲おうとしているのか、ただ単純に集まっていたのかはよく分からぬが、俺を敵と見ていることは確かなのでさつさとフルボッコにしてから先に進もうと思います。あれ？こんな性格してたっけ？まあ、今はいいけど。

基本的に虚刀流は徒手空手である。

つまり、

「体鍛えて、技の効率を良くしないとほとんど意味ねえんだよ！…」そんなことを言いながら、虚刀流に近い徒手空手で近くに居る奴らに回し蹴りを食らわせる。

一撃一撃に力を込めないと効果がないため本当に面倒である。ま

あ、その辺は半人半魔と言つ今の所回復以外で効果を現した事のない部分に頼つている。

後方には本当に頼りないと言える中身の有つたり無かつたりする弾幕で牽制と攻撃している。特に中つてないので牽制になつていて。手で攻撃を捌きながら脚で急所つぽい所に攻撃しているが、妖怪の急所つてどこなんだろうね。蟲つぽいのも居たりするし。まあ、蟲つぽいのは弾幕を普段より多く撃つて殺す。蟲なんて消えればいいのになんでいるんだろうね。そんなことを思いながら近くに居る蟲以外の妖怪に攻撃していく。

さつきから、攻撃したり攻撃を対処するときに体を回転させるから、正直…気持ちわるうえふ。

体を回転させるのをやめて懷から防御用のスペルを取り出し、それに攻撃を受けさせその隙間から弾幕を打ち込んでいる。一つ一つに回転を加えろ！敵に抉り込むように撃つんだ！！……誰に行つているんだろうか？

回転した後特有のふらつきから解放されたので、足に力を入れて地面を蹴り正面に居る妖怪Aの顔に踵落としを決めて、落とした足を軸にして右隣に居る妖怪Bの頭に回転しながら、また踵落としを顔に入れる。それを何回か繰り返していると一体一体がそれなりの距離を取り始めた。……団体行動取れるんだ、と関係ありそうで無い訳でもないと思えることを考えていると、

妖怪C、D、Eが襲ってきた

コマンド

：撃

：特

スル

：防御

「マンドー！仕事しろオオオオオオ！」
「これ変に読み間違えられるぞー。○撃つて攻撃なのか？砲撃なのか
？あ、自由に読み取ればいいのか。

ひかりの爆撃

ひかりは爆発した。

GAME OVER

いや、ねえよ！確かにそう読み取れるかも知れないけど、それはねえよー！それ以前にあって欲しくないわ！

爆撃つて自分が爆発するの！？空中から爆発物を落とすことを爆撃つていうんじゃないのか？！

(もしくは空襲)

いらねえよそんな情報！誰だ今地味に付け加えたうえで思考に入つて来たのはー！

(私だ)

「誰だよー！」

(そんな事より前を見なくていいのか？)

「はあ？」

頭によく分からぬ声が響いてきてそれにツッコんでいたら、前方から妖怪C、Dが連係攻撃を仕掛けってきた。

一体目が難いだ腕をしゃがみこんで攻撃を避け、その体勢から前方に突っ込み、二体目の攻撃範囲よりも内側に入り込みさつきまでの勢いを殺さずに右手による拳底を撃ち込む。そこから左手で殴る。後ろに居た妖怪Cが殴つて來たので、体を右回転で反転することで攻撃を避けその流れで左足で頭を蹴る。

(クツツツ……フハハハハハハハ……やられはせん。やらせはせんよー！)

「五月蠅い」

(あ…ちょつ…ま)

また聞こえた声に対して能力で…あの、その、何だかんだで聞こえないようにした。

妖怪Eに対して膝蹴りを撃ち込んだ。

妖怪の群れを倒した

ひかりは経験値30手にい'r

気にしない。もう知らない。着信拒否にしてやる。電波状況0じやなくてマイナスにしてやる。

倒したの以外だと人里と逆の方へ行つた。何があるんだ。何があつたんだ人里の方に。

そんなことを思いながらだらだら移動中。

もう、なんでもありなんじやないのか幻想郷は。じうごう世紀末に末期が居てもおかしくないだろう。

此処（幻想郷）になら、宇宙人、未来人、異世界人、超能力者が居てもおかしくはない。

……未来人、以外なら該当するのいるな。こんな感じで、

宇宙人 永遠亭

異世界人 多分該当するなら俺

超能力者 能力持ち全員

未来人 居たとしても此処にはいない

多分こんな感じであるう。此処に来てからそんなに経つて無い筈なのに、なんかもう色々と諦めたな。

能力って何で決まるんだろうな。生まれや育ちが関係しているのだろうか。…考えるだけ無駄か。

そう思い一度考えることを止めて、今まであつた奴らの事を考えてみた。

どいつもこいつも人の意見を聞かないんじゃないだろうか。聞いた

ている奴の方が少ない。いや、自分勝手だからこそ普通に居られるのだろうか。

ため息をつきながら俺は人里へと入った。……そう言えば住む所決めてないな。

24話 戦闘シーンって細かく書かないと伝わりにくいが読者の想像が頑張るよ

感想などがありましたらよろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0578t/>

東方平凡録

2011年10月30日14時18分発行